

臆病な自分、人に向き合うこと

菊永 ふみ

一般社団法人異言語Lab.代表理事/コンテンツクリエイター

最初に言うておくが、執筆は全面的に苦手だ。自分の想いを文章で誰かに伝えることをためらうのは、自分が音声言語と視覚言語の世界を行ったり来たりするからだろうか。いや、そうではない、想いを世間に伝えることは気恥ずかしいのかもしれない。またそれは自分の考えが至らなくて誰かの誤解を招いたり、偏見や欺瞞に満ちた内容になっていたりしないかと思うと、立ち竦んでしまう。

そういえば、自分が読んだら絶対モヤモヤするだろうなというメッセージや刺激的な言葉は、ほとんど表面でさらっと流し、思考を停止してしまう。蓋を閉じて考えない悪い癖がある。素晴らしい映画やドラマも、誰かが亡くなるような悲しく辛いお話であると瞬時に感じ取った時に私は無意識に選択肢から外す。そこに出る人達の想い、それはフィクションであっても、実際に似たような痛みや傷を抱えている人のことを想像し、全身で受け止めてしまう。心のコップにその受け止めきれない気持ちがわっと溢れ、嗚咽し、息が詰まり、身体がしんどくなる。そのエネルギーを生成しなければならぬ未来が容易く想像できてしまうので選ぶのを避ける。本当に素晴らしい作品なんだろうな、と理解しているけども...

思えば、幼い時から、あの方と話したい、何を思っているのか聞きたい、でも臆病なので話しかけることができないまま、時間が過ぎ去っていくことが多かった。心では気になりつつも、何事もないかのように振舞い、何かに没頭して取り組む。目的が分かっているものにがむしゃらに向き合っていた。傍から見たら自分の世界に没頭している人だ、と思われていただろう。臆病な性格のお陰で、こうやって集中力は育まれたのだなと今、気付いた。

意外に思われたのかもしれない。世間では異言語Lab.で異言語コミュニケーションを楽しもう、異なる者同士が向き合う面白さを、と大きく謳っている自分。本当は人一倍、人見知りで臆病なのだと思う。「あの人は何が好きで何が嫌いってどんなことを考えて生きているのかを異言語のせいで知ることができなかった、そういう悔しさが元になっている」らしきことをどこかのテレビで

語っていたけども、同じ言語の人であってもやはり知ることができなかったように思う。

だからこそ、体験型の謎解きゲームは臆病な自分を軽やかに払いのけてくれるコンテンツだと思う。主人公になった気分様々な人と声を掛け合いながら協力して同じミッションをクリアしていく。ゲームの非日常で、私を勇敢な主人公にしてくれる。臆病な私にはぴったりのコンテンツだった。

趣味が高じて、謎解きゲームを創ってしまい、連鎖が連鎖を呼び、異言語Lab.を設立し、異言語脱出ゲームを創ることが本業になった。異言語Lab.を通して沢山の仲間、一緒にやりましょうと声をかけてくださる、企業様・団体様・アーティストさん達と仕事ができるようになった。彼らの存在に私は何度も救われた。普段の自分では出会うことも関わることもなかったような人達と対等な関係を築き、異を楽しむ未来を共に創っていける喜び。それは「異言語」という言葉が持つ力の大きさなのだと思う。

話は変わるが、あの時の哲学対話もそうだった。沈黙の中で筆談をしながらの哲学対話。ゲストがろう者の私だったからこそ特別な企画だったと思う。一つの言葉を通して、誰かの手によって網のように言葉たちが紡がれていく。喋った「誰かさん」ではなく、そこに紡がれた「言葉」に存在感があり、その言葉たちに視線が集中していたように思う。言葉そのものに、共感したり、疑問に思ったり、更に聞いてみたり...そこで書き留めたことを他の誰かが書き連ねていき、広がっていく。ある議論に集中して考えて書いていくうちに別なエリアで新たな議論が生まれていることに気付く。それを時間のずれがあっても、フラットに共有できる感覚も面白い。沈黙×筆談×哲学対話は私にとって何とも言えない心地よい空気があった。

もし手話や音声のような話し言葉であると、それは「誰か」に視線が集中し、発言に責任が伴い、窮屈になったりする。いい加減にしか考えていなかったことを見抜かれたり、うまくしゃべれない自分に落ち込んだり、あの人の話が妙に説得力あったりして、余計なフラストレーションを抱えてしまいがちである。また記録に留めないのが、ちょっとしたことで言葉たちがずると、逃げて行ってしまうのが惜しい。

ましてや私はろう者だ。圧倒的多数の聴者と手話通訳や音声認識アプリを通してのやりとりだと、その技術に頼っているようで、私はその人と関わった気になれない。確かに便利なのだが...。リアルタイムではないので、手話通訳を読み取ること、音声の誤認識を紐解くのに必死で何を話されているのかが、本質的に理解できないことがよくある。感情の重みや強弱、話のテンポ・リズム感が伝わりにくい。リアルタイムで共感・反論する術がなく、発言する機会を逃して

しまう。このように音声言語と視覚言語を行ったり来たりの世界では、誰かさんとの信頼関係の作りづらさも、没入のできなさも、割と日常茶飯事だ。

一方で、学生時代や今の仕事を通して、悪戦苦闘しながら手話・身振り・筆談・あらゆる手段を駆使して話をする事、そういう経験を共有した人たちとは比較的仲良くなっている。お互いが異言語な世界でその人に向き合い、伝え、分かろうとすることを体感できる没入感がある。このように異言語コミュニケーションで「あなたに伝えたい・あなたのことを分かりたい」の積み重ねをいかに実現していくか。これが私の、異言語脱出ゲームを創る原動力になっていたのだと思う。そしてこれは、確かに沈黙×筆談×哲学対話にも通ずる面があった。誰もがフラットであることが重要なかもしれない。

さて、その直接的な向き合いを大事にしている人は社会にどれだけいるのだろうか。この私のつたないエッセイをここまで読んでくださっている方にはぜひ覚えて欲しいことがある。

もしお店や病院、勤務先等々で思わず、ろう者・難聴者に会ったとする。言語が異なるので通じないと分かった時に、すぐ隣にいる連れに顔を向け、音声で喋ったりしていませんか。こういう場面を見る度に失望している。いやいや、私はあなたに向き合って話そうとしているのに。そしてその隣もろう者であることが多い。さらに面白いことに、あえてろう者の振りをしている、理解のある聴者だったりする。そういう訳で、連れの人にも通じないことを悟るとようやく筆談を始めるか、何かの手段を探ろうとする。異言語な人間は、目の前にいる人のちょっとした動きを感じ取り、その人の人間性を垣間見ているようだ。

最後に面白いエピソードをひとつ紹介して締めくくりたい。

某有名遊園地の船に乗って冒険するアトラクション。たまたま乗ったお客さん全員が手話で語る若者たちだったらしい。乗船員だけが、あの船の世界では、マイノリティだった。ホスピタリティが最高だといわれるあの世界で、お客様のみも合わさずに、ひたすら音声でしゃべり続けたと聞く。どういう心境だったのだろうか。もしも、そんな時、マイクを置いて、身振り手振り、絵に描いて案内をしてくれたら、この船は拍手喝采、きっとお客様も乗船員も一生忘れられない冒険になっただろう。

異言語・異文化に向き合うことを恐れない。そういう人に一人でも多く出会えることを楽しみに、私は、異なる者同士が没頭できる異言語脱出ゲームや新たなエンタメ体験を創り続けていきたい。

最初執筆は苦手と言ったが、意外とここまで書いてしまった。ああ、没頭できていたのかな。なんてね。

「発達障害」とされる外国人の子どもたちと私

金 春喜
ジャーナリスト

私は韓国籍だが、東京の下町で生まれ育ち、まともに話せるのは日本語だけ。両親が韓国語で夫婦喧嘩をしても、内容を理解できたことはない。台湾出身のEri Liaoさんのように、複数の言語の間で葛藤した経験もなかった。

なのに、私に与えられた(哲学×デザイン)プロジェクト(2021年8月)のテーマは「みんなのことば≠わたしのことば」。思い切って、「わたし」はいったん脇に置いてしまおうか——。そう思い、ここ数年じっくりとかかわってきた「わたしのことば」を発しがい人々への共感という「窓」を開いてみることにした。

2017年、大学院生だった私は、フィリピンから来日した中学生に日本語を教えるボランティア活動をする中で、ケイタクン(仮名、以下同様)と出会った。来日してわずかな期間しか経っておらず、日本語も十分に身につけていないケイタクンは、日本で「発達障害」だと診断されていた。

えもいわれぬ違和感があった。ケイタクンの母語はフィリピンの少数言語で、フィリピン人の通訳でさえもわからない。言葉が通じ合わない中で誤診されたり、「外国人だから」という理由で障害児として認められたりした可能性は、どうしても否定できないと感じた。モヤモヤは消えず、2018年夏から、教員や保護者にインタビューをすることにした。

ケイタクンたちに何が起きていたかを、「ことば」との関係で読み解いてみたい。まず、たしかに存在するのは、言語の壁だった。日本語ができないために高校受験を乗り切れず、進学先がない、将来の就職も絶望的——。ケイタクンと、その兄のカズキくんが抱えていた「外国人としての困難」は深刻だった。

困難の解決策として提案されたのは「障害児としての支援」。つまり「発達障害」の診断を得て、障害者手帳を片手に特別支援学校高等部に進学し、障害者就労を目指すという計画だった。しかし、この策謀を実現するプロセスには、言語の壁だけではなく、もう1枚の大きな壁も存在していた。

通訳のハンナさんによると、母親のマリアンさんは、学校の教員たちとの面談の場で、息子に発達検査を受けさせるという提案について「親としてはつらいし、嫌だ」という個人の納得の問題として、反対意見を漏らしていた。マリア

ンさんは、この本音を「学校側には言わないでほしい」と訴えたが、ハンナさんは通訳の責務を全うするため、日本語に訳して教員に伝えていた。いうまでもなく、通訳の存在は、マリアンと教員間の言語の壁を極めて低くしていた。

一方、教員たちがおらず、マリアンさんとハンナさんが2人きりで会った場で、マリアンさんは「中学校の先生たちのやり方が嫌だ」と、学校側の提案を明確に非難していた。個人の納得の問題を超える抵抗の声は、ハンナさんの胸の中にしまわれ、教員たちの耳には届かなかった。ここには「先生たちがいない場でないと、本音を言えない」というマリアンさんの心情が透けて見える。

このように、マリアンさんと教員たちの間にあったのは、日本語の壁だけではなかった。通訳を介して言語の壁を乗り越えられるような場合でも、マリアンさんが日本人の教員たちに面と向かって本音や不安を述べづらい状況、つまり、「立場の非対称性」という壁があった。マリアンさんにとっては、どうしても乗り越えることのできない壁だった。結局は、「圧力」と感じた経験を「感謝」という言葉で語りなおすことで、意に反する提案をも受け入れるしかなかった。

教員たちが認識していた問題も、日本語の壁だけではなかった。ケイタくんとカズキくんが低賃金の外国人労働者の家庭で育ち、貧困な生活環境で選べる選択肢も少ないことを、教員たちははっきりと認識していた。これらの「外国人としての困難」に、学校は対応できない。結果的に教員たちは、善意から、「発達障害」を支援策として選ぶことに決めた。

だが、こういった日本語以外の外国人としての困難や、マリアンさんが感じたような、外国人の親子と日本人の教員たちの立場の非対称性、支援者の善意から生ずるねじれた対応の実態は、一般的にはあまり語られない。ケイタくんのような例でさえ、「日本語能力の低さを『発達障害』と混同された子ども」としてシンプルに解釈されがちだった。

それだけ、外国人の子どもとの言語コミュニケーションの難しさに悩む人が多いことの表れなのだろう。だが、だからこそ、言葉という壁によって見えなくなりがちなの他の困難も含めたより広い問題の全体を、「わたしのことば」で伝えたいと思った。その行く末が、『「発達障害」とされる外国人の子どもたち』（明石書店、2020年）という単著の出版や、新聞記者になるという選択だった。

決意の根源には、私自身が直面した苦労がある。「ケイタくんたちのことを、もっと考えたい」。そう思っても、こういった問題を主題にした本はなく、手に入る数少ない参考資料も、内容は極めて限定的だった。自らの抱いた違和感を語るための「ことば」は、すでにある「ことば」の中からは得られなかったのだ。

難しかったのは、この問題を掘り下げる意味を身近な人にわかってもらうことだけではない。出版前、ある研究会で発表を予定していた時には、「事実じゃないだろうし、見るからに差別的な意図の透ける発表だから、やめさせるよう

に」という趣旨のメールが事務局に届いたこともあった。ある人には、「外国人の子どもが大変だなんて、ずっと昔からそうだ。いまさら書かなくても」と突き放された。「わたしのことば」で語ること自体が、何度も阻まれかけたのだ。

事実は否定され、問題を指摘しても非難される目にあう——。こんな言語空間では、当然、誰も何も語り始められない。ケイタクンのような子どもに立ち会った教員たちが、「立ち止まってみたい、考え直したい」と思ったとしても、声を上げることは難しかったはずだ。ヒントや盾にできる本さえも見当たらなかったら、自分の意見に自信をもつことも、反省してみることも、限りなく不可能に近い。だからこそ、見えづらい、語られづらい問題のリアリティを、まずは私自身が「わたしのことば」で伝えたかった。その一步を足がかりに、あらゆる人が、自分自身のことばで考え尽くしたり、話し合えたりする環境をつくりたかった。これが、「最初の1冊」を送り出すことにこだわった理由だ。

実際に、「わたしのことば」で書いた本が出版されると、周囲や世間の見方はガラリと変わった。ようやく語る言葉を得たといわんばかり、新聞や雑誌で本の書評や類似のテーマの記事が矢継ぎ早に掲載された。大きな風が、一気に吹いたようだった。あれほど口にしづらかった問題でも、1冊の本の出現だけで終わらせず、広く追いかけてもらい、フォローしてもらったことで、たくさんの「初めて知った、気づいた」「前から疑問に思っていた、ようやく言葉になった」という人たちに届いた。いまならきっと誰でも、この問題を口にするのに躊躇する必要はない。自らの手で作り上げた1冊にこめた「わたしのことば」が、まさに「みんなのことば」の一部になっていく、そんな経験だった。

もちろん、この1冊だけがすべてを変えたわけではないとしても、ようやく、この問題を語れる社会、目視したり疑ったり批判したりもできる社会になった。「わたしのことば」は、小さな1人の個人、なんの力もない若者の声でしかない。だが、研究者やジャーナリストとして、諦めずに「ことば」をつむげば、それが「みんなのことば」の一部になりうることには、大きな可能性を感じた。

私という個人の立ち位置についての考え方も、少し変化した。当初は、ボランティア活動で出会うフィリピン出身の子どもたちに、自分と重なる部分を認めつつも、どちらかという切り離して、「移民の一世、二世の問題だ」と距離を置いていた。その子たちは私と違って、明らかな日本語の壁を抱えていたためだ。

けれど、ケイタクんたちの経験を掘り下げるうち、言語だけでなく、より見えづらい「外国人としての困難」が潜むことに気づくと、私自身もそんな困難にからめとられた時期があったのではないかと、重ね合わせて見るようにもなった。

小5だった2005年頃に両親が離婚し、母子家庭で育つ中でリーマンショックが起きると、金融機関に派遣で雇われていた母も失業し、生活は厳しくなる一方。約5年間住んだマンションから都営団地に引っ越す準備のさなか、祖母と2

人きりで乗ったエレベーターの中で、祖母が「あなたの母親に、日本の教育を受けさせてあげられていれば」と涙した。そんなことを、ふっと思い出した。

今にしてみれば、「外国人だから」という理由で、つねに追いやられてきた人物に対して流された涙だったのだとわかる。母のように小学校から大学まで民族学校で学ぶことは、当時としてやむをえなかった。だが、日本社会では正統な学歴として認められないことが多く、母の再就労をことさら難しくしていた。

さらに母は、雇用を失ったことで貧困層の集まる地区の都営住宅に引っ越すことについて、「学校では先生や友達に言うてはいけない」と、私と弟に口止めた。そもそも、「離婚したことも、誰かに言うてはいけない」と、小学生の頃から口を酸っぱく言い続けた。子どもの福祉を顧みない自分勝手な母親の見栄だろう。ケイタくんたちに出会うまでは、そう思っていた。

だが、母は生まれてこの方、自分ではどうしようもない国籍、民族的背景の違いという身分で差別をされつづけた人だ。そんな人が、他人と異なるネガティブな属性を多数派の人々に明かしたくないのは当然の感覚だと、今なら理解できる。「他人と異なる」というだけで、どこに行っても、いくつになっても、差別をされ続ける。そんな社会で生きてきた人が過剰に恐れることを、同様の経験のない私や他の人が「子どもに圧力をかけている」とか「子どものためを思っていない」と簡単に批判できやしない。そして、おそらく重要なのは、母のように考える外国人の母親が他にいても、全くおかしくないということだ。

私の中3で摂食障害を経験したとき、2年目の付き合いになっていた当時の担任は、「あなたの家にお父さんがいないとは知らなかった」と言った。当事者の私でさえ、当時は家族について言葉にするすべを持っていなかったし、誰も説明しなかったのだから、その担任が悪いのではない。それに第三者が状況に理解を寄せても解決策が得られるわけではないことは、ケイタくんの場合と似ている。

だが、当事者が進んでことばにしない背景を、ことばにされないからといって、ないものように捉えるのは、正しいことではない。まして、障害の有無まで判断しようという重要な場面でなら、なおさらだ。

見落としてはならないのは、それだけ当事者でない人たちには見えづらく、踏み込みづらいものでもあるということだ。だからこそ、声にならない「わたしのことば」に耳を傾ける必要性を、「わたしのことば」でもっと伝えられたら。それがいづれ、「みんなのことば」の一部になり、当然のように意識されることになれば。そう願ひ、私は「わたしのことば」で語り、書き続けている。

小さな少年の形をした窓をのぞきこむと、いつのまにか、小さな「わたしの」姿が見えた。こんな風に「わたし」を振り返るのは、この夏が初めてだった。

動きたいけど動けない人が動けるようになるために

鞍田 崇

明治大学理工学部専任准教授

○なぜ哲学とデザインなのか

動きたいけど動けない人が動けるようになるために——。それが哲学とデザインの連携に僕が託してきたものだった。ここではその経緯を簡単にふりかえっておきたい。

哲学とデザインの連携を自分なりに構想したのは、かれこれ10年ほど前、2010年代初頭のこと。直接のきっかけは地球環境問題にあった。

地球環境問題はすでに半世紀にわたって様々な取り組みが試みられていた。にもかかわらず、解決へ向かうどころかむしろ悪化しているといわざるをえない現状をふまえ、その理由を考えた。結論は、個々人が動いていないということ。問題意識は高まっているはずなのに、実際の行動には及び腰のまま。社会変革に向けて、一歩が踏み出せない。そんな動けないままの人々が動けるようにするにはどうしたらいいのか。そそのかして誘導したり、強制的に命令したりすることによってではないだろう。そうではなく、個々人がそれぞれのスタンスでおのずと一歩踏み出すような、そんなきっかけをつくることができないだろうか。いずれにせよ、大切なのはどこまでも人にフォーカスすること、しかも十把一絡げに一般化してしまうことなく、個々のこだわりや関心、価値観に寄りそう仕方だ。

そんなことを思案するなかで考えいたったのが、地球環境問題の解決に向けた「人文的アプローチ」というもので、その基軸を哲学とデザインの連携に置いてはどうかと思ったわけである。形ある世界から形なき理念を導出する哲学と、形なき思いに形を付与するデザインと、ある意味対極にある両者があいまってはじめて、人が人であるゆえんを十全に汲み取ることもできるのではないかと、そうすることで個々人がそれぞれの仕方でおのずと一歩を踏み出すきっかけをつくることのできるのではないかと考えて。

○地球環境問題をめぐる学術的状況

「人文的アプローチ」なんてことを考えた背景には、当時、地球環境問題の解決をめざす取り組みをめぐって、学術的にも新しい方向性が模索されていたことがあった。そんななか掲げられたのが、「超学際(Transdisciplinarity)」というコンセプトである。既存の「学際(Interdisciplinarity)」は、たしかに専門の垣根を越えて多くの学術的成果をあげはしたが、問題解決への貢献はほとんどなかった。なぜか。分野を越えたといっても、所詮は学術の世界の中でのことに過ぎなかったからだ。そうした反省に立って、既存の学術の枠を超えて、学術以外の様々な立場の人たち(行政、企業、NGO・NPO、一般市民など)との連携の形を探ろうというのが「超学際」というコンセプトに託された意義だった。

こうした動向に共感しつつも、僕自身は、まだ何か飽き足りないものを感じてもいた。

折しも、2012年にブラジル・リオデジャネイロで「国連持続可能な開発会議(リオ+20)」が開催されることになっていた。「リオ+20」は日本ではあまり話題にならなかったが、1992年に同地で開催された「国連環境開発会議(地球サミット)」から20年を迎えるのを受けて、その間の地球環境問題への取り組みを精査し、抜本的な問題解決の方向性を探ることをねらいとして開催されることになっていた。「リオ+20」のそうした趣旨をふまえ、学術界からの対応として捻出されたのが「超学際」だったわけだが、その主たる担い手となったのは、それまで環境学を牽引してきた自然科学系のプラットフォームであるICSU(国際科学会議)だった。ただ、前述した「超学際」の意義をふまえ、ICSU単独ではなく、社会科学系の同種の組織体ISSC(国際社会科学評議会)と連携して、このコンセプトの実装化が目論まれた。だが、10年前はもちろん、現在にいたるまで、人文学系はほとんどコミットできていないのが実状である(ちなみに、ICSUとISSCの連携はその後も続き、2018年には合併して、「国際学術会議」(ISC: International Science Council)を設立するにいたった)。

「超学際」をめぐる取り組みに対し、すでに10年前に感じていた飽き足りなさは、まさにこの点にあった。求められているのは、地球環境問題の解決である。そのためには社会が変わらなくてはいけない。だが、社会が変わるとはどういうことだろうか。政策や制度を変えることだろうか。もちろんそれも必要だろう。だが、現状において、そうした取り組みがまるでなされていないわけではない。それこそ1992年の地球サミットを機に、環境問題に対する社会的関心は高まり、各国で様々な施策が採られてきた。にもかかわらず、冒頭に述べたように、解決に向かうどころか悪化しているのはなぜか。答えは簡単。政策や制度を変えたからといって、社会は変わらないからだ。政策や制度を変えれば、社会が

変わると考える傾向は、かつてのハコモノ行政を彷彿とさせる。いくら立派な施設をつくったところで、地域は活性化などしない。なぜか。使う人がいないからだ。施設ありきの発想にとられるあまり、眼差しが人にフォーカスされていないからだ。同じことが、地球環境問題への取り組みについても言えるのではないか。だとするなら、人を扱う学術分野である人文学系もキチンとコミットしなきゃいけないはずなのに、まるでそれが顧慮されていない。そんなことでは、せっかく超学際なんてコンセプトを掲げたところで、看板倒れにおわってしまう。

こうした状況を背景に、地球規模での環境・社会変化に対する「人文的アプローチ」の検討を進めなければならないと考えたのが10年前の自分だった。当時所属していた総合地球環境学研究所(地球研)で、CIPSH(国際哲学・人文学会議)はじめ、人文学系のいくつかの学術プラットフォーム関係者を招いたワークショップを企画したこともあった。何よりも、東京大学の梶谷真司さんにご協力いただき、哲学対話を基軸とした共同研究の立ち上げを試みたことは、その後自分なりにこの問題への追究を推進する上で大きな礎となった。

○ローカルスタンダードとは何か

ただ、ここまでの考えはあくまで俯瞰的な視点に立つものでしかなかった。哲学とデザインをドッキングさせればよいなどと、そんな単純な話として理解していたわけではないが、両者の連携の実際には踏み込めできていなかったというのが正直なところ。要は、人にフォーカスしなければいけないと言いつつも、実際に人と向きあうことはほとんどできていなかった。

そうした状態を打開するきっかけを与えてくれたのが、先の共同研究にほかならない。この共同研究では、方法論的に哲学とデザインの連携を目するとともに、地球環境問題の解決に資するべく、「ローカルスタンダード」という新たなコンセプトを掲げた。地域固有の特性にこだわりぬくことが、地域を超えた共感を育む上で大事なのではないかというのが、このコンセプトに託された思いだった。グローバルな問題を俯瞰し社会変革を志向しつつも、まずは身近な地域との関わりを問いなおすところから始めようとしたわけだ。ともすると、ひと事・よそ事になりかねない社会とのつながりをワガコトにするにはどうすればよいか。そうした問題関心に立つことで、フィールドワークに力点を置いた研究活動へと踏みだしていったことで、地域の実情はもとより、そこで暮らし活動する個々人と関わり合うようにもなった。

フィールドワークを推進する上で、予想外に大きな意味をもった要素があった。若者の存在である。2015年より、前年に新たに着任した明治大学で、研究メ

ンバーを主たる講師として、オムニバス講義を企画した。このことがきっかけで、フィールドワークを受講生の学生たちとともに手がけるようになったのだ。はじめは、未知の世界に触れる発見の機会を作ってやろうというぐらいの気持ちだった。ところが、発見の機会を得たのは、むしろ僕の方だった。学生たちの反応が素晴らしくいいのだ。フィールドに入った途端、みるみるうちに生き生きとしてくる。出会った風景、出会った人々を、こう、全身で受けとめて、全身で反応する。なんでもない(と大人の僕には思われる)言葉に泣き出す子もいる。そんなふう生き生きと反応する他の子たちについていけず、途中で脱落する子もいる。それも、何がよいのかわからず飽き飽きしてしまっただけで早々に退散というのではなく、同じように揺さぶられているのに、それを素直に表出するすべが見当たらず、周囲とのズレに堪えきれず、というふうだった。冒頭に述べたように、事の発端は、動きたくても動けない人々が動けるようにするにはどうすればよいか、という問いにあった。何がその契機となるのか。そもそも人が動くとはどういうことか。そうしたことを、まざまざと考える機会を見出したのが、この若者たちとのフィールドワークだった。

メインフィールドとなったのは、福島県の会津地方の山間部、昭和村である。ここ数年は、この間のフィールドワークを形にするべく、Web連載(灯台もと暮らし、2017年)、映画制作(「からむしのこえ」、分藤大翼監督、2019年)、本づくり(『からむしを續む』、渡し舟編、2021年)といったことに携わってきた。哲学とデザインの連携の僕なりのかたちではあるが、道半ばの感があるのを否めない。生みだされたこれらをどう育てていくか。そうして、ささやかでも社会が変わる方向へと、どのように寄与していくのか。ひきつづき、じっくり取り組んでいきたいと考えている。

お母さんは哲学者!?

高口 陽子(コウグチヨウコ)
練馬区議会議員

ビビビ——ッ!! こども哲学に出会ったときの、私の脳内です。「これだ!」、ビビビッときたのでした。かつて大学で哲学科・倫理学を専攻し(2000年前後)、就職氷河期もあいまって、就活を放り出してニート&プチひきこもり、からの～ブラック企業勤務、サブカルのフリーライターという、哲学とは無縁の人生を歩んでいた私。自虐的に、「哲学なんて何の役にもたっていないよ」とこぼしては、高い学費を払ってくれた両親を悲しませていたのです。

人生の転機は、こども。これまたビビビッときて結婚した夫との間に、ふたりの子が誕生(2009年、2012年生)。「よちよち歩きの1歳児は、石ころ一つに反応して、大人なら徒歩5分の距離が30分もかかるのか!」といった新しい世界が、突如開けたのでした。目に入るすべて、道ゆくすべてのものが、こどもにとっては不思議でいっぱい。石ころ一つで「なんだろう?」と疑問を持てるなんて——こどもはみんな、哲学者!

そしてそれは、今まで省みることのなかった、足元の“地域”という地平でもありました。徒歩5分の世界が、どれだけ大切か。3.11、東日本大震災でも、それを思い知りました。遠くの友人が何人いても、いざという時助け合えるのは、地域の仲間! そう思い、地域(東京都練馬区)の子育てボランティアに飛び込みました。ママ友づくりは苦手ですが、共通の目的をもった仲間ができ、地域に顔が見えるつながりが広がっていくことが楽しくて楽しくて……。

夢中になる矢先の2013年。下の娘が1歳を過ぎたばかりの頃、夫のがんが発覚。闘病の末、一度は職場にも復帰しますが、2015年に再発、余命宣告を受けました。まさに、がーん……いや、ダジャレを言ってはいけないのですが(夫、ごめん)。

そこからの私は、献身的な妻……には全くなれず(夫、本当にごめん)、突き動かされるように、「何かしなくては!!」と迷走します。今思えば、頼れる夫がいなくなったあと、どうやってひとりで子どもを育てていけるのか、ただただ不安だったから(ちなみに、夫のこととなると自慢しか出てきませんが、真面目で働き者で会社での人望も厚く、家族思いの子煩悩で、家事育児パーフェクト! 老後、私の介護もしてもらおう気満々だったのに……)。

その迷走中に出会ったのが、こども哲学。忘れもしない、毎日小学生新聞『こどもの哲学』の重版記念イベントで、「ビビビッ」ときた私は、その場で「ぜひ練馬にも来てください！」と、神戸和佳子先生をナンパしたのです。

当時、長男が小学生にあがる頃で、「考える力」が大切だと書籍や講座で言われつつ、学校教育への不安が募っていたこともあります。

そして2016年、「ねりま子どもてつがく」（通称ねこてつ）を立ち上げ。夫が亡くなってわずか5日後、アーダコーダさんのファシリテーター講座を受け、1か月後には、神戸先生をお招きし、第1回を開催しました。

第1回のテーマは「ひとはしんだらどうなるの？」。父親を亡くしたばかりの7歳の長男に、なんとというテーマ……と自省もするのですが。事前に子どものグリーフケア等の支援も調べていましたが、闘病が長かったからか、こどもの性格か、幼かったからか、ふたりとも不安定な様子もなく。「死」というものを、隠したりごまかしたりせず話していこう、一緒に少しずつ受け入れていこう……という思いをこめての、テーマでした。

はい、完全に個人的感情です。しかしそんな私の邪心を吹き飛ばすように、「たましいにおもさはあるの？」「かるいから、ふわふわとんでいけるんだよ」「たましいが学校にとんでいって、学校の七不思議になるんだよ！」

そこで飛び交った子どもたちの対話の、おもしろいこと……！「これはすごい!!」と、自分の「ビビビ」が間違っていなかったことを、確信したのです。

と同時に、「もし大学時代に哲学対話を知っていたら、人生が違った」とも。

子育てというのは、人生の生き直しのようなところがあります。こどもに自分の人生を背負わせるつもりはないけれど、成長していく子どもたちを見ながら、「ああ、親もこんなふうにしたのかな」「私も子どもの時こうだったな」と思うことが、たくさんあります。「哲学なんてなんの役にもたたない」と思っていた私自身の人生を、こども哲学が塗りかえてくれたような……。

その後、ねこてつは、仲間も増え、地域イベントに出展してみたり、コロナの今はオンラインに切り替えたりしつつ、年数回のペースでのんびり続けています。父親譲りの真面目な長男の気質にも合ったのか、わりと楽しんで参加してくれるおかげです。立ち上げ当時は4歳で、ゴロゴロ寝転がったり、お菓子をボリボリしたりだった下の娘も、今は一緒に参加。まあいつも、お兄ちゃんとケンカしながらですが。

そして2021年の今、長男ももう6年生。学校や社会の問題を、自分の頭で考え、「問う」ことができているな、と親ながら感じます。もちろん、こども哲学だけの影響ではないし、こども哲学の影響だけを取り出して検証することは不可能でしょう。それでも、「こども哲学の意義は？」としばしば聞かれる質問への答えのひとつが、今の息子自身だと思っています。

こども哲学は、こどもとともにあり、こどもは成長し、変わり続ける。「問う」こと、「考える」こと、それを受け止める場があること、そういう場があると知っていることが、子ども自身を助けるのではないか。人生に迷い、(私のように)つまずいた時、いつか「それでいいんだ」と思える日がくるのではないか。

そうなってほしいという願望もこめつつ、感じています。

今は、こども哲学の場も、オンラインも含めて増え、自分が開催せずとも、こどもが参加できる環境になってきました。長男も春から中学生。我が子とともにあるこども哲学から、もう一歩先へ——と、のんびりですが、考えています。

一方、親の私自身の人生も、さらに激動へ。思いがけず、今は区議会議員をしています。政治家になろうと思ったことは一度もないのですが、お誘いを頂き、「政治も、子育てや地域をよくしていくために必要なひとつ」と、決意。夫の死を経て、「ひとはいつ死ぬかわからない。やりたいと思ったことは、今やらないと。今でしょ!」と実感していたこともあり、清水の舞台を飛び降りました(「ビビビ」と「今でしょ」は、普遍的な名言だと勝手に思っています)。

議会というのは、喧々諤々、高度な議論をぶつけあい、“止揚”していく場だと思っていたら……「何を言うか」より「どの立場にいる、誰が言うか」が重視される場。最終的に「数」で決まり、権力が振り下ろされる場。「対話」とは程遠い、どころか、真逆の世界。驚愕でした。攻撃的なヤジなんて、哲学カフェだったら、ファシリテーターが「ひとが不快になることは言わない」と止められるのに……。

そんなわけで、日々ぐったりしつつも、本来はこういう場であってはいけない、「対話」をめざさなくては、と悪戦苦闘中です。「対話×政治」——まだまだ手探りの現状ですが、それでも、「対話」の必要性を肌身でわかっていること、「問う」「考える」ことをやめられない性分は、この仕事に生きています。

巡りめぐって、「哲学って本当に必要なんだ」「大学に行ったことも、無駄じゃなかった」と、今や心から思えるので、人生何があるかわかりません。

こども達がおとなになるまで、あと10年程。きっとあつという間です。自分が何ができるのか、今何をすべきか。コロナでさらに先が見えず、何が起るかわかりません。だからこそ、考えること、問うていくことが、ますます大事になる。

お母さんも、こどもとともに、考え続けよう。

考えることそれ自体を楽しみながら、次にどんなビビビッな問いに出会えるか、ワクワクしながら。

疑デザイン思考

小阪 淳
美術家

「デザインとは何か」といった問いは、様々な場面でたてられますが、答えを導くためにアートと比較するのは有効な方法でしょう。一つのコセヲを見定めるために、類似する概念との差異を手掛かりにするわけです。デザインが生み出すものは、道具や手法といった「機能するもの」であり、アートは道具や手法ではないというという差異は、一般的な理解に沿うものだと思います。アート作品を「豊かな気持ちになる道具」と解釈することも可能でしょう。しかし、素晴らしい映画を見て衝撃的に心が動かされた時に「ああ、この映画は豊かな気持ちになる役に立った」という言葉は出てきません。それは「役に立つ」といった概念を超えた価値にアートという行為が立脚しているからです。何かの役に立つためではなく、それ自身が価値であるようなもの。その価値をここでは「美」とよびます。

アートもデザインも「美」を成し得ます。デザイン特有の美は、基本的には「機能が導く美」です。機能するからこそ美しいということです。その美は「機能」に付随しているとは限りません。主従が逆転し「美」の実現のために機能することもあるでしょうし、機能そのものが「美」と言える場合もあるでしょう。デザインもアートも「機能」という言葉では語りえない「美」を実現しようという意味では同じです。

では「美」とは何でしょうか。ここでもまた類似する概念との比較をしてみましょう。比較対象として「真」と「善」を挙げてみます。「真善美」は人間が目指すべきとされる普遍的な対象ですが、これら三つはしばしば同一視されがちです。「真」と思えるものや、「善」と感じるものを「美しい」と表現することがあります。そしてそのような「真」や「善」はまさしく同時に「美」でもあります。しかし私たちはすでにそのような構図で収まるものだけを「美」と感じているわけではないことを知っています。悪が悪であるがゆえに美しさを放つことや、偽の力が持つ特有の美があることを知っているからです。さらに言うなら、一般的に「美」と対極の概念である「醜」ですら、その中に「美」を生み出すことがあります。

例えば戦争の道具である兵器の持つ「美」は、それが「真」や「善」とは言い切れない事例です。米ソ冷戦時代、ソ連の首都モスクワを核攻撃するために、「ヴァルキリー」と名付けられた爆撃機が試作されました。ヴァルキリーとは北欧神話に登場する、戦場において戦死者を選別する女性のことで、爆撃機ヴァルキリーはマッハ3という、とてつもないスピードでアラスカからモスクワまで無着陸で飛行し、核攻撃が行えるようデザインされています。この機体は無差別大量殺戮のために存在しましたが、残忍な機能の是非とはかかわりなく、その神々しい美しさは多くの航空機ファンを魅了し続けています。私自身、航空機ファンですが、ヴァルキリーは人間が作り出した最も美しい機械の一つだと思っています。膨大な開発費をかけて作られたヴァルキリーは、軍に正式採用されることはありませんでした。大陸間弾道弾の方がより目的(=大量殺戮)に適ったものと判断されたからです。

ヴァルキリーの開発の成果は、その後の民間の超音速旅客機の開発に活かされました。マッハ3を誇るヴァルキリーは超音速機が生む衝撃波(超音速飛行時に発生する音波)の研究に有効だったのです。しかし開発は断念されました。地上に対する衝撃波の悪影響を解決できないことがその理由です。「戦死者を選ぶ女性」は、機能を発揮することなく人々の利便性を向上するための試験体となり、その実現の困難さを明らかにしました。

このような極端な例だけではありません。私たちの身の回りには、戦争のために磨き上げられたデザインがあふれています。コンピュータは軍事利用の対象として、とてつもない進化を遂げました。インターネットも、利便性という言葉にとどまらない美しさをもちますが、その前身であるARPANETがアメリカ国防省主導で開発されたものであったことから、デュアルユース(軍用にも民生用にも利用できる技術)的な側面が強かったと推測されます。コンピュータやインターネットのみならず、デザインが生み出す科学技術の成果はみな、大なり小なりデュアルユースです。

さらに人は、「美」を感じるものを「真」や「善」だと錯覚することがあります。例えばプロパガンダとよばれるものは、このような錯覚を巧みに利用したものと言えるでしょう。戦時下に国家の命によって数多く描かれた戦争画は、国威発揚のための道具としてデザインされたアートです。そしてアートの体裁を採ることで、デザインであることを覆い隠しています。この場合、「美」は人々を魅了し、「真」や「善」と錯覚させる道具です。前述の兵器の美しさもまた、このようなプロパガンダ的な機能を持っているでしょう。

このように「美」は、「真善」、や「偽悪醜」と複雑に絡み合っています。そしてデザインもまたこの複雑さの中にあります。デザインが生み出すのは航空機やコンピュータのような「物」だけではなく、政治を含む社会制度も、まずは

その仕組みやルールがデザインされています。「民主主義」や「立憲主義」は、まさしく人類が長い歴史の失敗の中から生み出したデザインです。「人権」という概念も、人間の知性が生み出した究極のデザインです。デザインは常にイデオロギーや信念、思想とかかわっています。デザインとはそのかわりの複雑さを解決するものではなく、複雑さそのものの表象です。そして複雑さは社会そのものです。さらにデザインの向こうには、複雑なままの生々しい「美」が横たわっています。

人が道具や手法として目的をもって生み出したものは、全てデザインされたものです。つまり私たちはデザインに取り囲まれて生きているということです。ではこれらの様々なデザインがもたらす「美」に対して、私たちはどのような態度を取ればいいのでしょうか。揺らぎ続ける世界において「常に正しい答え」などありませんが、いつの時代であっても、「美」を批判的に俯瞰する視座を持ち続けることは重要でしょう。デザインがもたらす「美」を疑う視座です。この視座は、「問い続ける」という哲学の在り方そのものだと思います。そしてそのような視座を、同じ時代を生きる人々と共有し、互いに異なる価値を持つ人々が共に生きるためののりしろとすることが、哲学する目的の一つだと、私は考えています。

〈敵対者〉と〈対話者〉

佐藤 香織

神奈川大学非常勤講師

「戦争の語り方」を出発点として

「戦争」を、人間が武器を手にし、〈敵対者〉とみなされた他の人間と相対するという具体的状況であると想定してみよう。こうした状況において、誰かを〈敵対者〉とみなすことは、その誰かを〈対話者〉として承認することの拒否であるように思われる。たとえばモーリス・ブランショは「人間に対峙した人間は、語るか殺すか以外の選択肢を持たない」と述べていた。

しかし、本当にそうだろうか。

2017年7月に行われた〈哲学×デザイン〉プロジェクト5「戦争の語り方」で、筆者はエマニュエル・レヴィナスの主著『全体性と無限』(1961)における「戦争」の概念に着目することから始めた。再びレヴィナスの記述を参照することから出発して、この問いを考えてみたい。

〈敵対者〉について

〈敵対者〉とは誰かを考えることから始めよう。

「説得の言葉をわれわれの方がぜんぜん聞こうとしなかったら、それでも説得できますか？」これは、プラトンの『国家』の冒頭で提起された問いである。合理的な話し合いで互いに納得しようとする意志のない者、他人の言葉を聞こうとしない者との間には力づくで言うことを聞かせるという敵対関係が生じざるを得ないように思われる。似たような状況においてソクラテスは、相手の望むしかたを聞き入れ、結果的に自分の言説を聞いてもらい、さらに相手に話をさせることに成功した。ただし、この『国家』の冒頭においては、祭りの催しに行こうという第三者の提案によって話が逸らされ、ソクラテスは暴力を含む敵対関係に入ることを免れる。

誰かと敵対するということは、その者を「敵」として、つまり倒すべき相手として承認することに他ならない。誰かが自分のあり方を否定したり自分の為そうとすることを妨害するとき、また誰かが自分の意のままにならないとき、人は自己を保持しようとし、相手を了解することを諦め、受け入れることを拒絶

し、その相手との対立の関係に入る。ところが、こうした敵対関係は均衡した状態を保ち続けるわけではない。というのも、敵対関係において、一方の他方に対する目的は、相手の存在を否定することにあるからである。敵対関係とは他人に害をなし、相手の存在を否定しようとすることであり、これを殺意と呼ぶこともできよう。〈敵対者〉とは、「私」が殺意を抱くがまだ殺していない相手のことである。殺人が実際に行われてしまえば、その相手はもはや存在なくなり、敵対関係は消失する。さらに、物を破壊しようとする際に物と自分との間に見出される関係とは異なり、いわゆる敵対関係にあっては、自分の側も暴力をふるわれ殺される危険に曝されている。

ただし実際には、「敵」は人間のみを指し示すとは限らない。「戦争」が、集団どうしの武力を伴う衝突を意味するにとどまらず、個々の様々な事柄や事物の対立と統一という運動によって生成変化する現実そのものを指し示すのと同様に、「敵」もまた、武器をもって相対する人間を指し示すことにとどまらない。たとえば人間にとっては、特定の状況に置かれた人間の生命や人間的なあり方を脅かすもの、そして何らかのしかたで打ち消され、排除されるべきであるとみなされるものは、人間であるかどうかを問わず「敵」と呼ばれうる。

たとえば「災害」や「災厄」はしばしば人間にとって大きな脅威をもたらす、そして打ち倒されるべき敵として映る。カミュの『ペスト』(1947)においては疫病という「災厄」を「敵」として戦う医師、そして閉鎖された都市の人々が描かれていた。社会現象が「敵」となる場合もある。たとえば「貧困」や「不平等」といった現象は、貧困や不平等に喘ぐ人々にとって否定されるべきものであるのみではなく、しばしば社会にとって根絶すべきものとみなされる。ある思想やイデオロギーが「敵」とみなされ、それに抗する運動が生じることもある。

さらに、戦争における人間の抽象化も生じうる。たとえばボタン一つで人命を奪うことが可能な装置がある場合には、〈敵対者〉と向かい合って武器を向けるような関係が問題となっていない。この場合、人は抵抗や訴えを全く受けることなく、そして自らが死の危険に曝されることなくして標的となる人物を死亡させることが可能である。また、そうした装置を想定しなくとも、爆撃など相手と対峙することなく相手を殺す例を通じて、戦争において「敵」が非人間化されていると示すことが可能であろう。

これらは、人間の姿をとらない「敵」、いわば「抽象化された敵」であるように思われる。「敵」との対立関係は、あるものと他のものとの差異の産出といった出来事に含まれている。そうした中において、「抽象化された敵」の担い手としての具体的な〈敵対者〉が常に存在するとは限らない。ところが、「抽象化された敵」と具体的な〈敵対者〉の区別がつかない場合であっても、人は「敵」との対話を求めてしまうことがあるのではないか。

〈対話者〉について

「戦争は、言説が可能であった場においてしか生じ得ない」とレヴィナスは述べていた。武器を使用する攻撃が開始され、その攻撃が続いている場所においては、言葉を用いて互いにとって有利な方策を探ろうと交渉したり、相手を威嚇して制圧しようとしたり、相互に対等な人間として協定を模索することによる戦闘の回避の営みは既に挫折している。しかし、このレヴィナスの言明は、〈敵対者〉が可能的な〈対話者〉にほかならないということをも示している。むしろ、戦闘中には、兵士は通常、直接に相手と言葉を交わして了解しようとしたり支配しようとしたりした後で相手を殺そうとするのではない。しかし、こうした場合においても、兵士は、言葉を交わしえなはずの相手と可能的には向かい合っていたことになるだろう。

ところで、〈敵対者〉に対して向けられる言葉は、交渉や制圧や協定とは別の様相を呈することがある。レヴィナスは、「他人とは、私が殺したいと望みうる唯一の存在である」と述べるとき、事物と人間的存在を区別する。物は破壊行為に対して抵抗することも、慈悲を求めて哀願することもない。レヴィナスによれば、自分が対峙しており、そして「殺したい」と思っている相手を前にした場合には、自分の予測を超えて暴力を被る側が抵抗してきたり、もしくは言葉や表情で訴えることで殺人を拒んだりする。事物を破壊する時には謝罪することは問題にならないが、人間に暴力を振るってしまった場合には謝罪が必要になることもある。抵抗や謝罪といった例に見られるように、人は、敵対関係においてなお、交渉や制圧や協定とは異なる言説的關係を求めることがありうるのである。

もう一つ、別の場面を確認したい。〈哲学×デザイン〉プロジェクト5でも引用した、この史代『夕風の街』(2004)の主人公である皆実は、広島原爆投下後十年という歳月を経て原爆症を発症し、死ぬ直前に「嬉しい？十年経ったけど原爆を落とした人はわたしを見て『やった！またひとり殺せた』とちゃんと思ってくれとる？」という言葉を残した。これは独白なのだろうか。それとも対話なのだろうか。

実際には原爆投下はマンハッタン計画にしたがってなされた。原爆を投下したパイロットもいれば、原爆の投下を命じた司令官もおり、また原爆の開発に関わった科学者たちもいる。これら原爆投下に関わった様々な人物が、原爆による多数の死者のうちのひとりの死を、他の人々の死と区別された誰かの死として知ることはない。皆実の言葉は、これらのうちの特定の誰かに向けられたわけではなく、その意味において、具体的な〈敵対者〉を目指しているわけではないが、確かに誰かに向けられている。彼女の言葉は、敵対関係の根源に対話的關係が存在することの証左と読むこともできよう。

「内臓の破片」のような血を吐いて死にゆく皆実は、死に際して、自分の言葉が決して届かないことを知りながら、そこにはいない誰とも知れぬ相手に語りかける。爆弾に倒された側が、戦争が終わって、対話的關係も敵対關係もなくなったように見える後で、肉体の死に際して語りだけを残すのである。戦争も肉体の死も、意味の断絶という結果を導くことはない。むしろ、あらゆる意味を断ち切るように見えるこれらの出来事に際してなお、意味は産出され続けているのではないだろうか。

〈敵対者〉と〈対話者〉の区別に先立つ「語りかけ」

〈敵対者〉と〈対話者〉の關係は、背反的關係ではない。〈敵対者〉は、対峙の場において、殺害計画の遂行を頓挫させるような抵抗を示す者である。そのような者は、かつて〈対話者〉であったかもしれない人である。〈対話者〉は武器を隠し持って今にも〈敵対者〉となるかもしれないし、逆に〈敵対者〉と対話に入る可能性は閉ざされていない。〈敵対者〉と〈対話者〉の間の境界を明確に定めることは困難である。

順番が逆なのかもしれない。じっさいのところ、語りかける前に、相手が〈敵対者〉であるか、それとも〈対話者〉として話を聞いてくれるのかを知る術を、語りかける側は持っていない。『夕風の街』における死にゆく皆実の語りは、誰とも知れない相手に向かう「語りかけ」が可能であることを示している。相手を〈敵対者〉もしくは〈対話者〉として承認するに先立って「語りかけ」の欲望が生じているのである。

豊かな人がいる場には

重江 良樹

映画監督

映像ジャーナリストに憧れて専門学校に通い、ドキュメンタリー映画というものに出会った。速報的に伝えられていくジャーナリズムの世界へ行きたいという漠然とした考えが、社会課題ともいわれる事象や人間そのものを、映画という方式でじっくり浮かび上がらせると共に、観る側にも考えることを促すようなドキュメンタリー映画との出会いにより一気に転換した。その後、「何か社会課題がありそうな所はどこか」と考え、カメラを携え、大阪市西成区の通称「釜ヶ崎」という街へ。暴動、覚せい剤、ホームレス、という先入観を持って訪れた釜ヶ崎のど真ん中に、拙作ドキュメンタリー映画『さとにきたらええやん』の舞台となった、子ども達の居場所である「こどもの里(以下、里)」はあった。40年以上に及ぶ活動の歴史があり、いつの時代も子ども達と共に在る里は、地域の子も達が無料で利用できる遊び場であり、様々な事情により自宅で過ごせない子ども達の一時宿泊の場、里子として里で寝食をする生活の場でもある。そんな里と出会った私は、子ども達の溢れんばかりのパワーと優しさ、おかしさと愛おしさに惹かれ、撮るという目的も忘れ、5年ほど里に通った。その頃にはもう「撮りたい」より「共にいたい」がまさっていた。5年の間に、子どもにはすごい力があり、その子ども達によって無意識にも私自身が元気づけられていたこと、様々な困難を背負わされている子どもがいること、そんな子ども達を支え、共に生きる職員の存在を知った。映画という道に進むか否か悩んでいた私だが、自分の大切な場の、素敵な人たちを撮りたいと思った。映画を撮らせてほしいという提案をした時も、ボランティアではなく、カメラマンとなった私に対しても、子ども達や職員の態度は変わらなかった。カメラを持った私を、子ども達は受け入れてくれた。こうして撮影はスタートし、子ども達の持つ力をカメラに収めていったが、障がいや虐待など、様々な背景を持つ子ども達の繊細な部分については、どのように取り扱うか悩んだ時期もあった。そんな時、映像素材を観てくれたある先輩監督に、「カメラと撮影対象との距離が遠すぎる。人生の一部を撮らせてもらってるんだから、しっかり近くで見つめて撮らない」と言われ、ハッとした。意識的に繊細な場面での撮影を引いて撮っていた自分

を恥じた。人を撮るという行為をする人間が、一番してはいけない行為だと思った。カメラは時に凶器となる。撮影対象を傷つけたり、嫌な思いをさせることもあるだろう。それでも相手の様子を見ながらカメラを携え、嫌がれば引きつつ相手を想い、時には相手の状況に自身の感情もみくちやにされながらも、共にいるのが撮る側の責任であると考えた。その人の人生の一部を撮り、社会に公開する者として。その後、撮影が終わり、カメラを介した関りが終了してもその関係性は途切れることがなく、たまに会えば近況を聞き、その頑張る姿や困難を乗り越えようとする力にまた私自身元気づけられ、励まされることも多い。カメラを介して共にいた時間が関係性を強固なものにしてくれたとも思える。里の職員たちを見ていても、遊びを中心に子ども達と日々接しながら、保護者と会えば他愛ない会話や日常についての話をする。そんな共有された時間が互いの関係性を密にし、何か困りごとを抱えたときは信頼して話をしてくれるようになっている。そうした関係性のあり方は撮影時の大きな参考になったし、支援職というフィルターを外して見ると、地域で共に生きる者としての在り方だと感じた。専門性の必要なアプローチをしながらも、支援職であるから支えるのではなく、自分の身近で関係する人が悩んでいれば話を聞き、苦しんでいれば胸を痛める。良いことがあれば共に喜び、分かち合える。専門性の必要な支援も大事だが、その前に人と人との関りが前提にある事が大切なのではないだろうか。「支援をしてあげている」という、意識的にも無意識的にも放出されがちな空気感ではなく、ただ身近で困難を抱える人に、「どうしたん？大丈夫？」と言える関係性が最も重要ではないかと私は考える。子どもにも大人にも、居場所の必要性が議論される昨今だが、仕事として、ライフワークとして、居場所と呼ばれる場を訪れることは多い。そしてどんな居場所にも必ず「人」がいる。それがただ支援者と呼ばれる人なら、利用者が抱える問題を解決すべく立ち回り、仕事をしてくれるだろう。それが利用者の最善の利益なのか、本人は安心して話し、頼れているのかは別にして。しかしそれがただの支援者ではなく、支援者でありつつも「共にいる人」であれば、本人の心の奥底にある気持ちを傾聴しつつ、本人にとって最善の利益となるよう動いてくれるだろう。深刻な問題から他愛ないことまで、安心して話が出来よう。この「安心して話せる」ということは極めて重要で、たとえすぐには解決出来ないような悩みや相談事でも、共にいる人が親身になって聞いてくれるだけで気持ちは和らぐし、自分のことを肯定的に受け止め、どうすればよいか分からない時は共に悩んでくれる、ただ「共にいる」という人の存在が、これまで訪れてきた魅力的な居場所には在るように思える。ただ単に支援が必要ならば、公的な機関や専門性があるだけの場を訪ねればいい。支援の以前に必要なのは、人と人との関係性で、そこには安心感がなくてはならず、その安心感がいずれ信頼感となる。ある子

が以前、「手と手を取り合って共に進もう」的な標語に対し、「手と手を取り合うにも自分がしんどかったらそんな無理やし、安心できる大人とか居場所が無いと、手なんか取り合えない」と言った。子どもの本質を見抜く力に改めて感心させられた。血の通わない支援、関係性ではなく、共に悩みつつも、共に泣き笑いする心の通った繋がりこそ人を豊かにする。そしてそんな豊かな人がいる場は有用性もあるが、何より魅力的だ。私の仕事は人間を撮るという性質上、楽しいだけではすまない仕事だが、豊かな場での豊かな人たちとの出会いや交流は、ドキュメンタリー制作を業とする私の糧となっている。これまでに撮影を通し出会ってきた人たちとはそう頻繁には会えないが、こうした繋がりを感じさせてくれるみんなの存在に、私もまた生かされているのだと思う。

出合いをデザインする

柴崎 菜苗

一般社団法人子どもの成長と環境を考える会

はじめて会う人や、知り合っただいぶん経ってからでもよく聞かれること。「子どもの成長と環境を考える会」という団体が、いったい何が目的でどのような活動をしているのかということです。

2009年の設立から、高等学校をメインに

①生徒募集(総務) ②生徒の学力向上＝教員育成(教務)③進路支援(進路)という学校の3つの分掌を軸として支援をしています。

①生徒募集

東京・千葉・埼玉など様々な地域で学校相談会を開催し、小中学生や保護者を招いて多種多様な学校との出合いの場を提供しています。塾などが定めた偏差値などの数字ではわからない学校の魅力を伝えることに力を入れています。

この学校相談会を企画運営するのは数名で行っていますが、人とのかわり方は膨大な数になります。まず参加校の先生方。校長・副校長・教頭はじめ、生徒募集担当の先生方。例えば40校参加する場合は少なくとも40名の先生へ連絡します。来場する小中学生と保護者は多い会場だと3,000名以上となり、これを年間15回程度開催します。今ではPTAから連携の要望もあり、各地域でなくてはならないイベントとなっています。

当日の運営は教員志望の大学生たちが大きな力になってくれます。学生はそこで教員の仕事が授業以外でも多岐にわたることを目のあたりにします。参加校の教員対応、会場案内や、児童生徒の勉強の相談など、さまざまに対応することによって、社会人となって現場へ放り出された時には大きなアドバンテージとなって自信につながっています。

このシステムは最初から出来上がっていたわけではなく、先生方に頼りながら、失敗を重ねてだんだんと作られてきました。しかし一言でかっこよく言えば、代表の「人を巻き込むデザイン力」のたまものなのです。

もう一つ、『生徒募集』のくくりでやっていることが、学校案内の制作です。公

立の学校案内は予算が限られているので、簡素で手作り感のあるものが多いのですが、イメージ先行で「学校ブランディング」をテーマに取り組んでいます。

ここでも代表の「人を巻き込むデザイン力」が功を奏します。哲学対話で有名になった東京都立大山高校では、「梶谷先生と校長の対談」というこれまでの都立高校の学校案内には全く見られなかったスタイルを用いて注目を集めました。梶谷先生が「子どもの成長と環境を考える会」に巻き込まれた瞬間です。「大山は変わる！」というイメージを見事に植え付けたわけです。



また、イメージ先行で学校案内を作り上げるには、センスの良い写真も必要でした。しかしカメラマンを雇う予算はありません。私たちの強みは「人を巻き込むデザイン力」です。ここでは、これまでの活動を通して出会った写真好きの公務員の方が休暇をとってプロボノで撮影をしてくれます。今ではセミプロとして個展まで開くようになりました。こういった様々な方の協力のもと、私たちの団体は成り立っています。



学校の明るいイメージ＝カラー写真 が当たり前という暗黙の空気の中、モノクロの表紙は学校内で相当の抵抗があったようです。また、軽音部が大会で優勝したことを裏表紙に掲載したことで、次の年の新入生の多くが軽音部に入学しました。

②教員育成

学校の肝である生徒の学力についてかかわる部分です。児童生徒が楽しく時には大変な思いもしながら勉強に励むわけですが、本質は児童生徒云々ではなく、先生の「授業力の向上」という考え方で私たちは関わります。

当初は、様々な学校で専門家を招き講演やワークショップをするスタイルでしたが、梶谷先生と出会ってからは「哲学対話」を取り入れた研修会や職員会議を取り入れました。職場としての学校現場で、いかに先生が生き生きと働けてなおかつ生徒のために全力投球できる場になるかをイメージして支援してきました。最近では埼玉県製の定時制の教員研修で「哲学対話」を実施しました。コロナ禍の影響もあり先生方の横のつながりが希薄になっていたようでしたが、90分後には大変な盛り上がりで終わりました。一か月後に生徒の哲学対話を計画していましたが、学校全体が対話に前向きな良い雰囲気の中で実施することができました。

現在では「教員志望の学生」に注力し、勉強会を実施しています。現在の教員として獲得してほしい「対話力」や「ファシリテーション能力」を養っていきます。また勉強会はもとより学校現場にインターンシップのような形で関わり、授業見学や授業サポート、放課後の自習室支援等を行います。学生はここでも教員になった時にアドバンテージをもって4月から働けることになります。

学校や学生を巻き込んでつながりをデザインすることで、私たちの活動はさらに強固なものになりました。

③進路支援

生徒自身が「将来や卒業後のイメージを描けること」が目的の活動です。

大学の教授を招いての「模擬講義」、また中高校生が大学を訪ねていく「研究室訪問」、さらに様々な職業の方を招いて仕事のやりがいや苦労話をしていただけ「社会人講演」などを通して生徒の興味関心をくすぐります。

ある高校では、「模擬講義」をした大学の先生に、2年後その大学へ受験を決めた生徒が直接訪ねて行きさらに詳しい話を聞きました。モチベーションを高め、課題となる小論文を書き続け見事に合格しました。生徒の心に火をつけることが、後々に実を結んだことで、私たちの喜びもやりがいも確かなものになりました。

また、大学入試が一般入試から総合選抜型に変わっていく中で、探究心や文章を書く力を武器にして大学に行こう！という支援もはじめています。哲学対話と文章講座を柱にして「何が好きなのか、大学で何がしたいのか」を突き詰めていく講座です。

梶谷先生には当初「模擬講義」の講師探しをしていた中で出会いました。「模擬講義」の一つの学問分野だった哲学対話でしたが、【問う・考える・語る・聞く】というシンプルな行為が私たちのすべての活動に当てはめるとスムーズに進むことに気づき、梶谷先生は私たちの活動すべてに巻き込まれていくことになりました。

私自身は、勉強が苦手です。体育と美術と給食が好きな普通の子供でもでした。『哲学』と言って思い当たるのは一度だけ。中学生のときに「ソフィーの世界」という本が出版され、意気揚々と本屋で買い求め数ページで挫折した苦い記憶しかありません。

この団体の活動目的は「子どもや大人、すべての人をつなげて活動をリンクさせること」です。学校や大学、地域のなかで出会いをデザインする。何とかぶれずに活動できているのではないかと感じています。

日常を離れ、自分の音を確認する場

紫原 明子

エッセイスト

スマホがあるせいで居場所を問わず連絡に追われ、空いた時間ができたらできたで、特別見たいわけでもない誰かの私生活を、SNSを開いてついだらだらと眺めてしまう。これだけ日常的に他人と繋がり、他人の情報を得続けているにも関わらず、かつて私が担当していた、とある女性向け媒体のお悩み相談コーナーに当時最も多く寄せられていたお悩みは、「友達の作り方がわからない」「友達がいない」だった。見渡せばそこらじゅうに人はいるのに、そこらじゅうにいる人たちがそれぞれに、友達がいないと感じている。誰にも言えない寂しさを抱えている。悩みを送ってくれる人たちと私とは会ったこともなければ、本名だって知らない。けれどその人たちの文章からは一様に切実な思いがひしひしと伝わってきて、果たして自分に何ができるのか、仮に何もできなかつたとしても、どうかこの人に少しでも幸せでいてほしいと願わずにはいられなかつた。

そんなときふと、もしかしたら本当はこれだけでいいんじゃないか、と思った。たくさんの言葉を交わすことがなくても、普段のその人を何も知らなくても、ただ誰かが正直な思いを打ち明け、それを受け止めた人が、その人になんとか幸せでいてほしいと心から願う。自分の幸せを祈ってくれる人がいると実感できる。そんな場所さえあれば、確かに「ある」と感じられる繋がりを作ることができるのではないか。

そんな思いつきで2020年6月、「もぐら会」というオフラインサロンを始めた。インターネットを通じて参加者を募っていながらオフラインサロンと位置づけたのは、この会の主たる活動である月に一度の「お話し会」を、オンラインでなく現実の一箇所に集まって開催することにしたからだ。誰かの言葉を単に情報として受け止めるだけでなく、その人の表情や佇まい、匂いや音と併せて、感じる。言葉にできるものとできないもの、その両方を自分と他者との間でやりとりする。一度のお話し会には大体10人から20人くらいの人が集まる。全員で輪に

なって座り、まずは私が指名した最初の話者が、簡単な自己紹介(嘘でも、日替わりでも、パスしても良いことになっている)と、その日の体調を話す。それからあとは自由に、話したいことをなんでも好きなように、好きなだけ話してもらおう。話し終えたところで、次の人を指名する。指名された人は「ご指名ありがとうございます」と言ってから、また前の人と同じように話し始める。お話会でやるのは基本的にはこれだけだ。

この会をスタートする前に、こういう集まりを考えていると友人に話したところ、友人は内心、そんなことをやってみようのかと、とても心配していたらしい。かく言う私も一体どんな集まりになるのか、蓋を開けてみるまでまったく想像できなかった。けれども初回、20人が東京・渋谷の会場に集まって、緊張した面持ちでひとり、またひとりと口を開いていく中で、私は次第にこれまで感じたことのないような高揚感に包まれた。とびきりの話題を披露し合うわけでもない。どっと笑いが起きるようなことも、人々が感動に咽び泣くなんてこともない。ただ、目の前にいる初めて会った人たちそれぞれに、それぞれの大切な人生があること、その中で彼らが確かに生きているのだということを、私自身は決してそこに存在していなかったにもかかわらず、静かに、強烈に実感する。全員が話し終わるまでの約2時間、そんな発見が見事に20人分繰り返されることとなった。そして幸いなことにその場では、私以外の参加者たちも、少なからず似たような感想を持ってくれたようで、ただ一人ずつ話していくだけのこの集まりは、少しずつ参加者を増やしながらか、三年目の現在に至るまで、途絶えることなく続いている。

回を重ねる中で、いくつもの面白いことが起きた。たとえば、誰も意図していないのに、多くの参加者の話題が大なり小なり一つのテーマに沿うものになる、そういうことがままある。最初の話者が話した内容ととてもよく似た話を、遅刻などの理由で聞いていないはずの最終話者が、何も知らないまま自分のこととして話すということもある。お話会に参加するようになって半年後や一年後、随分と時間が経ってから、突然その人にとってとても重要な話を、ぼろりと打ち明けてくれる人もいる。そんな瞬間には、おそらくその場にいる全参加者が、この話はこの人にとってとても重要な話なのだ、ということは無言のうちに察する。

2021年に新型コロナウイルスが流行するようになり、オフラインサロンとして始まった私たちの集まりは、やむを得ず主たる場をオンラインに移すことと

なった。オンラインの画面では、話す人、聞く人の全身が見えない。誰かが話したり、聞いたりしているとき、その人の手がどこにどんな風に置かれているのか。内股の人なのか外股の人なのか。大柄な人なのか小柄な人なのか。そういったことは、オンラインではわからない。何より、今まさに自分の目の前にいて、やろうと思えばすぐに自分に直接的な危害を加えられる人が、どんなに自分の弱さを見せたとしても、決して自分を脅かすことなく、黙って受け止めようとしてくれる。そんな風に、ただ同じ場にいることによって得られる信頼や安心は、オンラインになって少なからず得難いものになった。

一方で、オンラインになることで、毎月東京に来場できない遠方に住む人、ともすれば日本以外の国にいて、日本とは異なる時間を過ごしている人とも、同じ画面の中に集まれるようになった。去年の夏のある日、南の島に住んでいる人の画面から、東京では聞いたことのないリズムで蝉が鳴いているのが聞こえてきて、はっとしたことがあった。色々な場所に自由に行き来ができなくなったからこそ余計に、自分が今いる場所以外にも世界は広がっていて、そこにはちゃんと、自分と繋がり得る誰かがいるという気づきに救われた気がした。試行錯誤しながらではあるけれど、オンラインとオフラインには、それぞれにそれぞれの良さがあり、それぞれにそこでしか感じられないものがあるということがわかってきた。

ここまで、もぐら会はお悩み相談の連載をきっかけとして始まったことを書いてきた。けれど正直に言えば、寂しさや孤独との付き合い方、人とどう生きていくのかという問題については、私が物心ついたときから長く、自分自身の問題として、痛みとともに向き合い続けてきたものでもあった。特に日常にコロナの影響が色濃く影を落とした2021年は、過去になく人と生きること、人と生きる自分について、再考を迫られる一年だった。ウィルスを発端に、それまでないものとされていた世の中の脆弱性が次々と表出し、変容した日常に不便さを感じながらも、元の日常が戻りさえすればそれでいいと安易に考えることもできず、であるとすれば私自身は何をし、どうあるべきかと考え出して、途方に暮れてしまう。何かをしなればと思うけれど、何をすればいいのかわからない。苦し紛れに、今まで知らなかった世界を見てみようと思い立ち、音楽の勉強を始めた。

それまで全く気がつかなかったけれど、音楽の世界と人間の世界はよく似ていて、面白い。似たような人間がいたとしても同じ人間は二人といないように、

本当は「ド」とか「レ」とか、便宜上区切られている音の間にも、グラデーションで無数の音が存在している。一つの音が他の音と、横に、縦に連なってメロディが生まれ、ハーモニーが生まれ、曲が生まれ、物語が生まれる。楽譜上に配置されるすべての音が、何かしらの役割を持っている。

音楽を学び出すと、この数年続けてきたお話しは、参加者それぞれが普段演奏している曲から離れ、自分だけの音を確認するための場所なのだと思うようになった。私たち一人一人は、大人になってしまった結果、なかなか単音でばかり鳴ってもいられない不憫な音の粒だ。ルートとなる音に、人生で習得してきたさまざまな役割を新しい音としてひとつ、またひとつ積み上げ、毎日、和音として鳴っている。ときには演奏する曲に応じて器用に音を足したり、引いたりもする。表向きにはうまくやっているけれど、たまにふと窮屈さや疲れ、なんとも言いようのない居心地の悪さを感じることもある。そんなとき、自分は本来どんな音で鳴っていたか、どんな音で鳴っていたいのか。そんなことを、誰かの作った曲に強引に飲み込まれることなく、自分の気が済むまで、ゆっくりと確かめる。そのためのお話しなのだと考えるようになった。

こんなことを言うと笑われるかもしれないけれど、もしかすると世界全体で長いこと演奏してきた壮大な曲が、コロナ禍を機に、そろそろ一旦終わろうとしているのではないかと最近、思う。もうこの先に、以前と同じ楽譜が続くことはなく、新しい楽譜に変わるときが来ているのではないか。私たちはまさにその節目にいるのではないか。そして、もしそうだとすれば、私たちはこれから前例のない中で、他者とともに、手探りで自分と他者の音を新しいやり方で響かせ、新しい曲を紡いでいかななくてはいけない。どう響き、どう連なっていくのか。今まさにさまざまな分野で、そのための実験、実践の場が開かれつつあるように感じる。

アウトサイダー・フィロソフィー宣言

清水 将吾

哲学者、小説家、子どもの哲学実践者

1. 哲学を開かれたものにするには？

哲学はシンプルだ。問いと言葉があればよい。問いはどんなものでもよい。道具はいらない。言葉さえあればよい。問いを出発点にして、言葉を使って探求する。ただそれだけのことだ。

だとすれば、哲学は誰にでもできるはずだ。哲学は、哲学研究者だけのものではない。誰であれ、問いについて言葉で考えている限り、その人は哲学者なのだ。

それなのに、世の中では「哲学」というと、専門家が研究するものだと思われる。専門家は哲学をしているが、そうでない人々には哲学はできない、そう思われている。哲学を、専門家でない人々にも開かれたものにするには、どうすればよいだろうか。

こうした問題意識をもつ哲学研究者も増えてきた。一般市民が集まって話し合う哲学カフェのような場を開く研究者も増えてきた。私もその一人だ。しかし、哲学カフェが増えれば哲学が開かれたものになるのかといえば、それでは十分でないとは私は考えている。哲学をほんとうに開かれたものにするには、哲学カフェを、さらに広い文化のなかに置く必要がある。私はその文化を〈アウトサイダー・フィロソフィー〉と呼びたいと思っている。

2. アウトリーチ活動と哲学カフェ

大学などの研究者が「アウトリーチ」と呼ばれる活動をすることがある。「アウトリーチ」とは「手を伸ばす」という意味で、研究機関の内部から外部へと「手を伸ばす」ことを表している。

たとえば、科学の分野には「サイエンス・カフェ」という活動がある。サイエンス・カフェでは、科学者が研究成果を一般市民向けに紹介し、皆でディスカッションをする、といったことが行われている。研究者がいわゆる「象牙の塔」にこもってはいならないとすれば、すなわち、専門家による研究が一般市民にも開かれているべきだとするならば、こうした活動には深い意義があると思われる。

しかし、哲学カフェの活動は、アウトリーチ活動ではない。つまり、哲学カフェは、哲学研究を一般市民向けに普及させるための場ではない。

そもそも哲学カフェでは、専門家が研究紹介をするようなことはしない。専門家であっても、一人の市民として話をし、話を聞く。すでになされた研究を紹介するのではなく、その場で新たに哲学が始まる。そしてそれは、非専門家の視点から始まる哲学探求だ。

専門的研究の営みを、石を積み上げることに喩えることができる。そこにはすでに積み上げられたおびただしい数の石があり、専門家は石の山のうえに、新たな石を乗せる。

哲学カフェでの営みは、それとはまったく異なる。積み上げられた石の山の外側で、新たに石を積み始める。あるいは地面を掘り始めるのかもしれない。とにかく、専門的研究の集積の外側で、一から何かを始めようとする営みなのだ。

3. アウトサイダー・アート

芸術の分野に、「アウトサイダー・アート」と呼ばれるジャンルがある。専門的な芸術教育を受けていない人々によるアートのことだ。

たとえば、画家を志す人の多くは、芸術大学の油絵科などに進学し、現代に至る絵画史を踏まえた教育を受ける。そして、芸術大学を卒業すれば、絵画史の文脈のなかで、自身のオリジナリティを追究していくことになる。

アウトサイダー・アートの芸術家たちは、そうした文脈の外側にいる。つまり、芸術史の文脈を踏まえ、いきなりオリジナリティを発揮してしまう芸術家たちだ。

オーストリアの芸術家フランツ・チゼックにとっては、子どもこそがそのような芸術家だった。子どもは専門的な芸術教育を受けていない。芸術史の文脈の外側にいる。それどころか、大人のようなものの見方の外側にさえいる。そのような子どもによる創作物もつオリジナリティに、チゼックは価値を見出した。

教育者でもあったチゼックは、子どもに大人の作品を見せることを避けた。大人の作品を見せれば、子どもはその影響を受けてしまう。それは芸術史の文脈からの影響となる。するとその影響によって、子どもは芸術史の文脈の内側へと引き込まれてしまう。それをチゼックは避けたかったのだ。チゼックは、子どもを芸術史の文脈の外側に置いたまま、子どもの作品の芸術性を育てようとした。つまり、子どもの芸術を子どもの芸術のまま育てようとしたのである。

4. アウトサイダー・フィロソフィー

哲学カフェで哲学をするとき、私は〈アウトサイダー・フィロソフィー〉の可能性を感じる。哲学史の文脈を踏まえ、哲学研究者としてオリジナリティを模

索するのではない。哲学史の文脈の外側で、いきなりオリジナリティが出現してしまう。そのようなことが哲学カフェでは起きる。それがアウトサイダー・フィロソフィーの価値だ。だから、私にとって哲学カフェの活動は、アウトリーチ活動ではなく、アウトサイド活動なのである。

さらにこう言うことができる。哲学研究者は、哲学史上の問いに対して、オリジナルな答えを探そうとする。すなわち、答えによってオリジナリティを發揮しようとする。それとは対照的に、哲学カフェで出現するのは、オリジナルな問いだ。出会ったことのない問いが、いままさにこの場にある。そのような瞬間が、哲学カフェには訪れる。哲学が問いから始まるのだとすれば、私はそのとき、哲学の始まりに立ち会っている。

さて、哲学カフェで始まった哲学を、どうすれば育てていけるのか。哲学カフェでは、言葉や表情が現れては消える。対話は移ろいながら進んでいく。だから、オリジナルな問いが出現したとしても、それは一瞬のことだ。その一瞬をどう捕まえて、どう育てていくのか。チゼックは、子どもの芸術を子どもの芸術のまま育てようとした。アウトサイダー・フィロソフィーをアウトサイダー・フィロソフィーのまま育てていくすべはないだろうか。

哲学カフェは哲学が始まる場であって、哲学が長く続く場ではない。哲学カフェでは、問いが生まれ、その問いについての探求がしばらく続き、また新たな問いが生まれる。それに対して、哲学を続けることは、何年も、あるいは何十年も、同じ問いをしつこく考え続けることだ。だから、哲学カフェの数が増え、哲学を始める人が増えたとしても、哲学を続ける人が増えるわけではない。むしろ、始まった哲学をどうすれば続けられるのか、悩む人が増えていくかもしれない。

5. アウトサイダー・フィロソフィーを育てていく

哲学に興味をもち、大学で哲学教育を受け、哲学の古典や専門書を読むための手ほどきを受ける。そして、自分で哲学書を読みながら、哲学を長く続けていく。そのようなコースはすでに用意されている。

では、哲学カフェのような場で哲学を始めたとして、そのようなコースをたどるのがよいのだろうか。いや、それだと、子どもに大人の作品を見せるようなことになりかねない。アウトサイダー・フィロソフィーを、哲学史の文脈の内部に引き込むことになりかねない。

哲学の歴史は盤石だ。哲学史は、各時代の最上級の知性たちによって積み上げられ、くり返し語られ、更新されてきた。その盤石さは、哲学を学ぶ人にとっては、その内部に引き込む強大な力となる。

アウトサイダー・フィロソフィーを、アウトサイダー・フィロソフィーのまま

育てていく。現在のところ、その道は用意されていない。

私にとって、哲学小説『大いなる夜の物語』を書くことは、自分のなかのアウトサイダー・フィロソフィーを育てる試みだった。哲学史を踏まえて論文を書くのとはちがったやり方で、哲学をする試みだった。論文は、論理の筋道を作り、答えを導き出す。私は小説を書くことで、物語の筋道を作り、問いを提起したかった。そしてできれば、読者を物語にいざなうことで、問いへといざないたかった。

そのうえ、読者をアウトサイダー・フィロソフィーへといざなうことができたなら、どんなに嬉しいことだろうか。たとえば読者が、自分で哲学小説を書きはじめたなら。あるいは小説でなくてもいい。哲学史を踏まえて論文を書くのとはちがったやり方で、読者が自分なりのやり方で哲学を書きはじめたなら、こんなに素晴らしいことはない。

文学ファンのあいだには、同人誌を制作する文化がある。プロではない人々が、自分の文学を表現することを楽しんでいる。それだけでなく、同人誌が流通する文化まで成立している。そうした文化が、プロでなくても文学を続け、それを発表しあうための素地になっている。

哲学ファンのあいだにも、同じような文化ができたならと思う。専門家でない人々が、自分なりに書いた哲学を発表する。ともに哲学する仲間ができれば、対話を重ね、同人誌を作る。それが流通するまでになれば、哲学史の文脈の外側に、新たな哲学の水脈ができるだろう。

その水脈は、専門家でない人々が哲学を続けるうえでの推進力をもつだろう。そして、その水脈が成長すれば、専門的な哲学とは異なった、オルタナティブな哲学になるかもしれない。

だから私は、これを読む人に、一冊のノートを買うことを勧めたい。そのノートを使って、自由に哲学をしてみてください。

あなただけの哲学ノート。それはアウトサイダー・フィロソフィーの水源となるだろう。

居場所

志村 亜希子

自立援助ホーム「樹の下ホーム」ホーム長

この度、「哲学×デザイン～居場所がなかったり、あったり、」という、普段「哲学」など馴染みの薄い言葉で対話の機会を頂き、なのに二つ返事で引き受けてしまった。時間を増すごとに「実は私自身が、これまでの生い立ちについて、じっくり向きあうことが必要ではないか？」と気が付いた時には少し焦った。

人生にはどのようなきっかけで何が起こるか分からない。

無意識にそっとしまっておいた記憶や当時の感情を呼び起こすのは、もっと難しいことだと思っていた。けれども実際に取り掛かってみると、意外にも冷静にパワーポイントを開いてキーボードをたたいていた。

ここには対話の時の話しに触れながらも、後に感じたことなどを「追記」という形で残してみようと思う。

私は、東京都内の病院で生まれて、数日後に両親が去り、保護された。乳児院、児童養護施設、里親家庭、そして最後にまた児童養護施設で育った私には、安心して生きていける場所が心の安全基地でもあった。

里親家庭での約10年間の生活は非常に厳しく、虐待が続く時期もあった。心理的、身体的虐待、私は不要な子どもだとはっきり言われ続けた頃は絶望的だった。しかし、その後高校1年の冬に児童養護施設への入所が決まり、初めこそ居心地が悪かったが、慣れていくにつれて職員が見守ってくれている実感があった。

里親家庭ではその日その日を何とかやっ生きていたけれど、児童養護施設へ入所してからは、明日はどうでしょうか？来月は？1年後は？そう考えられる日が増えていった。

また、高校の時に会った先生のおかげで、将来は児童福祉施設で働きながら社会へ恩返しをしていくと決めて、これからどう生きていくか、ようやく地に足がついたような感覚があった。

私自身の生い立ちを振り返ると、まさにテーマのように居場所があったり、なかつたりした人生であったが、人とのつながりの中で私の存在自体が認められていく実感を得てから、過去にこだわらず生きていけるようになった。

居場所は、大切な人が居てくれるという確たる安心感があって生まれる……
或いは作ってイける場所。移りゆくこともあるが、それで良い。

社会へ出て、仕事をするようになって、それまで目には見えないけど確実に感じていたフィルターがなくなった。実親が居ないというハンディキャップのフィルターだ。それだけで出来ないことは沢山ある。何気ない日常会話の中でも沢山の支障があった。うんざりするほどだ。それが常に悔しかった。

けれども、自分の意思で選択していく人生が、こんなにも素晴らしいのかと知り、早く大人になりたかった切実な願いが叶い、本当に嬉しかった。

たとえ、仕事で叱られてしまっても、それは私自身の責任だと受容ができたし、評価してもらうことも生い立ちに関係ないということが、何とフラットで心地よいのかと感動した。だから特に若い時には、仕事にハングリーだった。上司や仲間にも恵まれていた。がむしゃらに働いたし、どんなに大変でも平気だった。

20代は時をかけるように、仕事も遊びも時間の限り全力で楽しんだ。一般企業などで働きながら、児童福祉への転職の機会をうかがった。入所してくる子ども達がどれだけ過酷な成育歴であろうと、大人として共に自立に向かって生きていけるよう、共倒れしてしまわないように強くなりたかった。

そして27歳の時にいよいよ児童福祉の職に就くことを決めた。いざ、働いてみるとやはり想像を絶する環境で育った子ども達が多く、より身を引き締める思いで現場に立った。

とは言っても、私の過去がなくなるわけではない。ただ私の場合はそっと心の奥にしまうのが上手だったと思うし、人の支えがあったのが大きいと思う。

20歳の頃に、あるアメリカ人家族と再会した。ラスベガスのホテルのロビーだった。とても鮮明に覚えている。3歳の時に私を養子に迎え入れようと奮起してくれた家族だった。その家族の存在は知っていたが、教えられていたエピソードは全く違うもので、酷くショックを受けた。

17年間も会えずにいたのに、私のことを探して、幸せを祈り続けてくれたアメリカ人家族の存在が、血のつながりを超えた愛があるということ私に教えてくれた。少しずつ交流が始まり、日本とアメリカを行き来して、互いの

理解を深めていった。

実子が1人、養子3人を育て上げ、養子には黒人と黄色人のハーフもいる。アメリカのスーパーマーケットに行ったとき、レジのスタッフが白人、黒人、アジア人の集団を見て「あなた達の関係は？」と尋ねてきた。すると迷いなく「家族だよ」と答えた父を見て、レジスタッフも当然のように笑顔で返していた。くすぐったい様な気持ちになったが、ごく自然なやり取りにカルチャーショックも受けた。私たちの関係は今でもずっと続いている。

私自身の成育歴や気持ちについて順をおって掘り起こしていくこと、また対話をしながら多くの人へ伝えるのは初めての経験だったが、私自身が想像していたよりも気持ちの負担がなかったことは新しい発見だったし、対話後にしばらく考察してみた。

そしたら間違いなく娘の存在だとわかった。13歳の娘の存在である。

出産は助産師さんが驚いて、学生の講義の資料にしたい！！と動画のダビングを要求してくるほど超安産での出産だった。いや、私としてはかなり陣痛がきつかったし、大声を張り上げていると認識していたが、動画を見ると、自分でも驚くほど静かに痛みを耐えていた。子育てに突入してからは、途中の記憶がないと感じるほど、あっという間に月日が流れていった。

13年間で私を強くしてくれたのは、間違いなく娘の存在だ。いとも簡単に、私のそれまでの苦悩を軽くしてくれたと言うか、「ママ、わかったから、大変だったのはわかったからね。でもさ、もう大丈夫だから。それよりね、ほら！私がいるから。私、これから成長していくから！だからしっかり私を見てね！」と、そういつでも言っているかの様な娘が居たから、止まっている暇はなかった。

私が知る、私にとって唯一血を分けた家族だ。顔を眺めていると「あ、今の表情私に似ているな」とか、つむじの位置が人より低いところとか、やたらと丈夫な髪質とか、足の大きさや厚み、幅まで瓜二つである。

私に似ているところを見つけるのが楽しいし、娘が生まれてからずっと、それは更新し続けている。そして何より本当に頼もしく育った。毎日笑わせてくれる。怒らせてもくれる。少々雑に、そしておおざっぱに生きている私を正すようなことも言ってくれる。身長だって2センチほど超された。彼女の存在が、私をより強くして、そう簡単にはブレない母親にしてくれた。

今は私の居場所というよりは、こんな私だけと家族が大好きだと言ってくれる娘の居場所を大切にしたいと思う。それが現在の私の答えである。

世の中にはとても多くの子ども達が傷つけられている。

今もなお、救いがなく真っ暗闇の中で生きている子ども達が、命の危機にさらされている。そうした子ども達を何とか救おうと社会全体の関心も意識も高くなっているのは、児童福祉の現場で従事しながら感じるが増えた。何より当事者活動や発信力が活発になってきた。

子ども達が安全に安心して生きていく権利を第一に、丁寧に子ども達の居場所を作り上げていくのは並大抵ではない。

しかしつか私のように「今日も何とか生きられた」というところから、「明日も明後日も、これからも生きていく」と、未来に希望が持てるような社会にしていくために、私は今の自立援助ホームという現場でこれからも頑張っていくと思う。

「哲学×デザイン～居場所がなかったり、あったり、」の対話は、実は私自身にとって1番響いたテーマであり、このような機会を下さり心から感謝している。本当にありがとうございました。

自信を持って勧めている哲学対話とは (学校が変わる時～外から見た教育改革の実践のきっかけ)

白井 一郎

一般社団法人子どもの成長と環境を考える会 代表理事

2018年9月27日に待望の梶谷真司先生の新書が書店に並んだ。題名は、『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』。早速、東京大学の購買部で購入。なぜか自分が書いた本ではないのにとっても興奮した。それは「哲学対話」が、15年間 高等学校改革に関わってきた私たちの団体において自信を持って勧めている方法だったからです。

梶谷先生の研修は、いつも清々しい。本音で高校教員にお話を頂ける。それはとても素晴らしい場合もある。その一方で目の前で行われている研修を否定的に見てしまう教員も存在するので、いつもとても緊張します。

新型コロナウイルス感染症の拡大により、この2年間は梶谷先生に依頼する教員研修は特に無かった。しかし、ここにきて感染症が少しずつ落ち着いてきたことで一昨年度から相談を受けていた埼玉県立狭山緑陽高等学校の教員研修が突然浮上した。待ちに待った教員研修は、2021年11月25日に実施をした。

研修の内容は、

- ①「学校ってどんなところか？」
- ②「不登校とはどういうことか？」
- ③「不登校の生徒がいやすい場とは？」
- ④「哲学って何？」
- ⑤「問いはどんな時に出てくるか？」
- ⑥「哲学対話！」
- ⑦「哲学対話のルール」
- ⑧「哲学対話の効果」
- ⑨「哲学対話の実施」

埼玉県立狭山緑陽高等学校は、不登校を集めた昼夜間定時制の総合高校だ。教員の割合は、若手が7割ベテラン3割の学校だった。研修を受ける先生方のやる気が満ち溢れ一人一人の真剣な眼差しに私はとても安堵しました。研修後のアンケートでも学校のタイプに合わせて研修頂いたので先生方の反応はとても良かった。(※1_参考資料)

「哲学対話」に関する職員研修会

1. 研修会の感想や意見

「不登校とはどういうことか？」というスライドを見て、本校生徒の現状に当てはまると感じました。本校には、決められた枠・ルールの中で行動することが苦手で、他者に合わせることにストレスを感じる生徒が多く在籍していると感じています。その中で、「どうやって枠にはめるか。」「どうやって他者と協調させるか」ということばかり考えてきました。しかし、生徒を変えるのではなく、教室を生徒がしやすい環境に変えることが重要なのではないかと感じました。

また、「哲学対話」にもルールが存在するというを知り、「ルールがあること」が、不登校の生徒を苦しめているわけではないのだと思いました。そこで、『校則』と『哲学対話のルール』とでは、何が違うのかと考えました。そして、「禁止事項の数」・『～すべき』という事項の数に違いがあると感じました。「哲学対話」のルールにおいて、禁止事項と判断できるのは「②否定的な態度を取らない。」の1つのみです。このことにより、生徒に息苦しさを感じさせずに、活動させられるのではないかと思います。

3. 「哲学対話」を役立てる場面や方法

授業に役立てることができるのではないかと感じています。私が担当している国語科であれば、「読んだ文章について、疑問をあげさせる。そして、その疑問について話し合わせる」という形が考えられます。単元の最初と最後に、この形での授業を実施し、内容の変化を比較することで、授業の理解度を確認するということが可能だと思いました。

また、現在、私が担任しているクラスの生徒の中には、クラス内での人間関係に確執が生じている者がいるようです。この確執は、コミュニケーションの不足による、すれ違いの可能性があると思っています。そのため、「哲学対話」を実施することで、改善されるとよいなと感じています。

ほかにも、1で考えたことを踏まえて、「禁止事項の少ない授業ルール」を作ることで、しやすい授業環境を作ることができると思います。具体的なことは、まだ浮かんでいませんが、生徒を縛るためのルールではなく、生徒を守るためのルールを作り、授業を実施したいと思います。

※1_参考資料

実はこの指導方法に辿り着くまでに、私たちは5年間「そもそも会議」という対話を発明し実施していました。

「そもそも」という言葉は、企業でも学校でも会議でも授業でも禁句とされている言葉です。会議で決まりかけた事案に、「そもそもこの事案は必要ですか?」とか、学校の授業中に「そもそもなんで勉強しないといけないの?」という発言はご法度です。システム化された現代では、大人(教員)も子ども(生徒)

も疑問(問い)を投げかけてはいけない事が常識です。

今では、多くの学校で行った研修が評価され、教育委員会から学校改革の依頼を受ける様になりました。どの学校でも支援をする中で一番問題と感じたことが、システム化された常識でした。その常識とは、教師も生徒も考える事に慣れていない事でした。今でこそ学習指導要領は、平成29年から「思考力」・「判断力」・「表現力」・「学びに向かう人間性」などとうたっているが、新指導要領の教育を受けていない教員のほとんどは従来型の授業でしか未だに対応できていない。

因みに、「そもそも会議」も対話のルールに沿って実施します。
その「そもそも会議」をするときの6つの掟とは、

- ①わざとつまらないことを言っちゃおう！
- ②なるべく自分の体験を語ろう！
- ③正解の主張禁止！攻撃・説得禁止！
- ④そして変化していく自分を楽しもう！
- ⑤そうは言っても波風たったらそれもよし！
- ⑥聞いたことは今日この場限りで。

この6つのルールをもとに車座になって教員・高校生たちと対話をしているいろなお題を考えてもらいました。この取り組みは5年間で、何校へも広がり教員・生徒に向けて実施しました。

教育出版社への就職から25年間公教育に携わり、今でも私の学校への問いは、「そもそも、学ぶとは？」という事でした。

自分なりに「そもそも会議」なるものを高等学校で実践していましたが、私の人生の中で1番と言っていい衝撃的な事件が起きました。

2014年、東京大学産学協創推進本部の出版物より「対話技法による哲学の社会的実践」という当時、准教授だった梶谷先生の寄稿した文章をたまたま読み、脳内に何百万ボルトか判らないほどの衝撃が流れました。

その文章とは、「学校でも会社でも、家の中ですら、言うてはいけないこと、言うべきことのルールが決まっていて、みんなそれに従って話している。明に暗

に否定されるか排除される。そしてルールに従う人も従わない人も、ルールが決めた枠の中でしか考えられなくなっていく。「哲学対話」は、そうして生活の中に縛られ、身動きが取れなくなっている言葉と思考を解放し、異なる考え、異なる立場を互いに尊重しつつ、連帯感をもって語り合える場を生み出す。それは「哲学する」＝思考を広げ深める体験をすべての人に開く活動である。」

まさに私たちの活動を大学教授が実践されていたのでした。

その本を片手に、早速梶谷研究室のホームページからアドレスを取得し先生にメールを送りました。

そこからの8年間は、怒涛の哲学対話の始まりでした。

- 2014年07月12日 東京都立墨田川高等学校(模擬授業)
- 2014年07月17日 東京都市大学付属高等学校(模擬授業)
- 2014年12月19日 東京都立田園調布高等学校(大学訪問講義)
- 2015年06月18日 東京都立田園調布高等学校(模擬授業)
- 2015年10月01日 実践学園中学・高等学校(大学訪問講義)
- 2015年11月27日 東京都市大学付属高等学校(大学訪問講義)
- 2015年12月17日 東京都立田園調布高等学校(大学訪問講義)
- 2015年12月18日 東京都立墨田川高等学校(模擬授業)
- 2015年12月18日 東京都立雪谷高等学校(模擬授業)
- 2016年03月09日 大東文化大学第一校等学校(模擬授業)
- 2016年03月15日 東京都立江北高等学校(学問説明会)
- 2016年06月16日 東京都立豊島高等学校(大学訪問講義)
- 2016年03月22日 広尾学園中学・高等学校(模擬授業)
- 2016年04月01日 東京都立大山高等学校(学力向上推進校指定・3年間)
- 2016年04月01日 東京都立大山高等学校(月2回の放課後哲学対話・6年間継続)
- 2016年04月01日 東京都立雪谷高等学校(普通科中堅校における学習指導・進路指導に関わる研修・3年間)
- 2016年04月01日 東京都立雪谷高等学校(月1回の放課後哲学対話・3年間継続)
- 2016年04月01日 東京都立雪谷高等学校(新入生オリエンテーション・3年間継続)
- 2016年06月16日 東京都立田園調布高等学校(模擬授業)
- 2016年07月16日 東京都市大学付属高等学校(模擬授業)
- 2016年10月04日 東京都立駒場高等学校(大学訪問講義)
- 2016年12月21日 東京都立田園調布高等学校(大学訪問講義)
- 2017年03月13日 大東文化大学第一高等学校(模擬授業)
- 2017年07月19日 東京都立雪谷高等学校(大学訪問講義)

2017年10月24日	東京都立南平高等学校(模擬授業)
2017年12月18日	東京都立本所高等学校(模擬授業)
2017年12月22日	東京都立田園調布高等学校(大学訪問講義)
2018年03月05日	東京都立八王子東高等学校(教員研修)
2018年03月19日	東京都立江北高等学校(学問説明会)
2018年04月01日	東京都立豊多摩高等学校(月1回の放課後哲学対話・4年間継続)
2018年04月10日	東京都立八王子東高等学校(新入生オリエンテーション)
2018年07月19日	東京都市大学付属高等学校(模擬授業)
2018年11月01日	東京都立本所高等学校(模擬授業)
2019年06月12日	東京都立田園調布高等学校(模擬授業)
2019年07月16日	東京都立上野高等学校(大学訪問講義)
2019年07月19日	東京都市大学付属高等学校(模擬授業)
2021年04月01日	実践学園高等学校(受験講座・週2回)
2021年04月01日	上野学園高等学校(哲学チャレンジ・週1回)
2021年11月25日	埼玉県立狭山緑陽高等学校(教員研修)
2021年12月21日	埼玉県立狭山緑陽高等学校(全校生徒)

以上 哲学対話の実践は今後も続きます。

今の学校教育が、ものごとの本質を問う、考える場からかなり隔たっていることを痛感します。この課題があるから、学校で自信を持って勧めている哲学対話をする意味があると感じます。



恋愛結婚ではない結婚を求める31歳男の事例

鈴木 大貴

全性愛(パンセクシャル)の独身男性

初めまして、恋愛結婚ではない結婚を目指している鈴木と申します。〈哲学×デザイン〉プロジェクトとの関わりとしては、2021年2月末に開催されたイベントであるプロジェクト25「新たな結婚のカタチを求めて」にゲストとして参加しました。イベント参加当時、私は結婚について人生で最も考えていました。この原稿では、私が結婚について考え、少し変わった婚活を通して感じたことを書きたいと思います。

自己紹介をさせていただくと、私は1990年生まれの31歳男です。東京都に生まれ、父の駐在に合わせて中学時代三年間をアメリカの現地校で過ごしました。高校からは帰国して理系の大学院を卒業後、IT業界で働いています。恋愛面では、小学生の頃から学校の同級生女子と男女交際をする一方で、同じ塾に通っていた可愛い男子のことが好きで追いかけて回し、塾内で冷やかされるような人間でした。セクシャリティとしては全性愛(パンセクシュアル)と呼ばれるような、性別にとらわれない恋愛を堂々とする傾向にありました。アメリカで過ごした中学時代では人種や国籍を問わず人を好きになることも経験し、高校、大学にかけては趣味だったインターネットを通じた出会いから年齢や生活コミュニティの異なる人との恋愛も経験しました。

好奇心旺盛に多くの人と出会ってきた学生時代において、ひとつ象徴的な出来事がありました。当時高校生だった自分がSNSを通して大学生の女性と交際を始め、二、三年ほど付き合っていた頃、彼女から同棲をしないかと誘われたことがありました。彼女は大学卒業を控え、社会人になろうとしていたタイミングだったので、将来の生活を見据えたステップとして提示してくれたのだらうと思います。ところが、自分は同棲の先にある結婚を想像して受け止めることができず、彼女と別れる決断をしてしまいました。私の回答にショックを受けたのか、彼女は入社予定だった会社への内定を辞退して一年間の海外留学にかけたこともあり、私自身も「大変なことをしてしまった」と感じました。その頃から、結婚についてより真剣に考えるようになりました。

社会人になり、周囲に既婚の友人も増えてきた頃に、私は自分が恋愛関係の

延長に結婚をおこなう恋愛結婚を求めているという確信を深めていきました。この背景には上述したような私の恋愛・性愛観が存在すると思います。そもそも自分は性別関係なく人を好きになり、(多くの人にとってもそうだと思いますが)時間差で異なる人と恋愛できることを体感していました。日本の標準的な恋愛結婚においては、相手は異性に限られ、また結婚後に不貞行為をおこなうことは認められません。私としては、こうした恋愛結婚の当たり前はあまりに窮屈で、気軽に許容できるものではありませんでした。

折角お読みいただいて恐縮ですが、ここまではよくある話だとも思っています。性愛嗜好がオープンかつ自由な人間が、性的な排他性を強要される結婚をしたいと思わない。ただそれだけの話だといえます。実際に私の恋愛・性愛遍歴を知っている知人からは「鈴木は結婚しないタイプだよ」とよく言われますし、私もそう言われることに納得感があります。しかし、私はこうも考えているのです。果たして自分のようにわがままな人間は本当に結婚できないのだろうか、と。

実は、私は結婚に強い憧れを持っています。冒頭に書いたイベント参加時の自分の表現を使うと「この世で唯一の理性を超えた関係であり、不確実な未来における絶対的な拠り所」として結婚を求めています。逆にいえば、それくらいの特異な関係を築けないのであれば、それは結婚でなくてよいと思っています。結婚なんてしなくても、損得勘定でwin-winになる関係は社会生活の中で自然に生まれますし、同様に消えていきます。大病を患ったときにケアしてくれる深い仲の友人や恋人はいても、友人であれば自分の家庭をさすかに優先するでしょうし、恋人であれば恋愛感情が続いていることが条件になるでしょう。

言葉通りの意味で、絶対的かつ永続的に関係を約束しあえることに結婚の価値はあるのであって、法的に離婚できるからと離婚を少しでも想定しながらする結婚に自分は一切の興味を持たません。私にとって、性的にオープンかつ自由な個人的な嗜好と、この超保守的ともいえる厳格な結婚観というのは矛盾なく両立します。むしろ前者による弱みを補強するために後者は保守的にならざるを得ないというのが実情だと感じています。私が持つような結婚に対する期待値は、恋愛がカジュアル化して恋人関係が深い意味を持たなくなった近年でより強くなったといえるかもしれません。実際に「婚活」という言葉の生みの親である山田昌弘氏は著書の中で以下のように書いています。

「よく、近代化によって個人主義が浸透したと言われる。だが、それは、個人が「長期的に信頼できる関係」を必要としなくなったことを意味しない。むしろ逆である。共同体が崩壊し、宗教が衰退したため、「長期的に信頼できる関係」が自動的に与えられる社会ではなくなった。だからこそ、長期的に信頼できる関係を「個人的に」作らなければならない社会になったのである。それは、多くの人

にとっては、昔のような共同体や宗教集団ではなく、家族を作ることによって達成される。というよりも、信頼できる関係を「家族」という言葉で呼ぶようになり、それを自分で作り出さねばならなくなったのが近代社会の特徴なのである。

個人は、家族の中に生まれ、信頼できる関係（通常は親）の中で育てられる。しかし、親との関係は永続しない。それゆえ、結婚して男女の関係を安定させ（恋人は長期的に安定した関係とは考えられていない）、子どもをもつことによって、将来にわたって、「自分を心配してくれ、自分を必要としてくれる存在」を確保しようとする。これが、近代社会において、結婚したい、子どもをもちたいという欲求の基礎にあるのである。」（山田昌弘『少子社会日本——もうひとつの格差のゆくえ』 p.50-51）

山田氏も書いている恋人と結婚相手は別物であるという主張を極論化したものが、自分の希望といえるかもしれません。自分は結婚に「この世で唯一の理性を超えた関係であり、不確実な未来における絶対的な拠り所」であることを求めますが、恋愛・性愛関係は結婚相手との間に求めておらず、（一般的な趣味などのように）婚外で各自が節度をもって恋愛すればよいと考えています。こうした考えは、一昔前は実現が難しい戯言であったかもしれません。しかし、性交以外の方法による人工的な妊娠手段が拡充し、避妊、性病感染予防の選択肢も普及した現代において、十分に検討しうるアイデアだと思っています。

こうした結婚に求める期待値をもとに、私は婚活をしました。2021年の1月に「友情結婚」とも呼ばれる、性的関係を持たないことを前提とした結婚を求める者同士のマッチングサイトに自分の状況と希望を投稿しました。当月中に4人の女性と連絡を取り合い、うち2人の女性と実際に会いました。複数回会って互いの価値観や希望のすり合わせをおこない、1人の女性と結婚を見据えるようになりました。このサイトで出会う女性は皆、性愛と結婚を割り切って区別する人たちでした。それぞれのセクシャリティや求める結婚生活のイメージは異なるものの、恋愛関係を結婚に一切求めないが故に、必然的に結婚に対する期待が明確になっていてすり合わせがしやすいと感じました。

このサイトで知り合った女性とは8月から同棲を開始し、12月現在も同棲生活を続けています。彼女とは性的関係を持たず、ルームシェア相手のような関係でいます。一緒にゲームや食事、ペアストレッチなどをしながら日常生活を過ごしており、時折小旅行も楽しんでいます。来年には結婚やシリンジ法（家庭で可能なシリンジを用いた簡易な人工授精）での婚活をトライしようかとも話しています。同棲生活において話し合いが必要になることもあります。少なくとも自分にとっては不安定で非日常的な恋愛・性愛が内包されない生活であることもあり、穏やかに過ごせていると感じています。

星を眺めるということ

高梨 直紘

東大EMP 特任准教授 / 天プラ 代表

…星を眺めていったいなにが楽しいのか、私はいまだに分からない。春の星は霞んでいてよく見えない。夏は虫との戦いだ。秋は食欲が優る。冬は寒くてやっつけられない。星を漫然と眺めていても特に幸運は降ってこないし、仕事が片付くわけでもない。それでも人は、星を眺めるのが楽しいと言う。そのたびに私は落ち着かない気持ちになる…

私はこれまで、天文学の教育普及と呼ばれる分野の活動に長く関わってきました。天文学を専攻した私にとって、社会に天文学を繋ぐことはライフワークとも言えることです。各種の講座を開いたり、子ども向けの教材を作成したり、サイエンスカフェと呼ばれるような対話型のイベントを実施したり。ふだんの暮らしの中に天文学を編み込んでいくことを意識して、さまざまな活動を行っています。そういった活動群の中でも、もっとも多く手がけてきたのが天体観望会です。望遠鏡などを使って月や星などの天体を眺める天体観望会は全国各地で行われていますので、もしかすると皆さんも参加したことがあるかもしれません。夜空に有名な星や星座を探してみたり、望遠鏡を使って月のクレーターを眺めてみたり、土星や木星といった有名な惑星を覗いてみたり。小さなお子さんからご高齢の方まで、幅広い世代の方が星空に触れる機会のひとつとなっています。

…しかし、星を眺めることになにか特別な意味があるのだろうか。猫の寝顔を眺めるのも、水槽にメダカの泳ぐ様子を眺めるのも、ぼんやり窓の外の景色を眺めるのも、私にとっては大した違いはない。どれも同じようにそれなりに面白いし、それなりに退屈である。目の前に寝っ転がっている猫の方が、手が届くという意味においては星を眺めるよりもずっと身近な楽しみだ。星を眺めることに喜びや楽しみがあることを認めないわけではない。しかし、それは本当に星ならではの喜びや楽しみなのだろうか…

このような天体観望会の楽しさは、星を眺めることだけにあるわけではありません。学校に夜集まって、ふだんは立ち入れない屋上で星を眺める、わくわくした感じ。仕事帰りに、いつもとは違う路線に乗ってたどり着いた初めての場所です。星を眺める、ときどきした感じ。星を眺めるに至るプロセスの全体がふだんとは違う非日常の体験であることも、天体観望会の魅力のひとつです。山頂から景色を眺める瞬間だけに山登りの喜びがあるわけではなく、計画を立てている時から実際に山頂に至るまでの過程すべてに、山登りの楽しみが含まれているのと同じことと言えるでしょう。

…それはつまり、ふだんどんな暮らしをしているかによって天体観望会の魅力は大きく左右されてしまうということでもあろう。毎晩、仕事として星を眺めることになる公開天文台の職員にとって、星を眺めることは日常であり、そこに非日常の喜びは見出しにくいということになる。テーマパークで働く人々は、毎日わくわくするのだろうか。恋人未満の時にしたデートの甘酸っぱさと、その後の展開に想いを馳せよ。もしこの喜びが天体観望会の本質であるならば、日常的に星に接していれば接するほど、非日常の喜びは減ずることになる。それは実に悲劇的な構造ではないか…

皆で一緒に眺めることもまた、天体観望会の魅力のひとつです。偶然同じ観望会に参加することになったまったく知らない人たちとであっても、同じものを眺めて共に感じ入ったり、驚いたりできるあの感覚。互いに響き合う合唱の喜びや、一体となって盛り上がるスポーツ観戦の高揚感に近いかもしれません。昼間の明るい中では気恥ずかしくとも、夜間の暗い中であれば見知らぬ人とも案外話せてしまうもの。会場のあちこちで、いろいろな話し声が自然と聞こえてくる雰囲気は、静まりかえった通勤電車の緊張感の対極にあるように思えます。

…そのような中であって自分だけその雰囲気に馴染めなかったとしたら、それは一層深い孤独を感じるようになるまいか。喧噪の中にひとり取り残される孤独。周りで盛り上がっていけばいるほど、それとは同じように感じられない自分への不安が募る。その場にいれば自然と乗り越えられるとするのはそれができる人の思い込みであって、そうでない者に対する想像力の欠如である。もちろん、その孤独こそ味わい深いという処方もあるが、わざわざ天体観望会に求める必要もない…

現代の天体観望会では望遠鏡も使いますが、星は肉眼で眺めるのがふつうで

しょう。これは、今も昔も変わらないこと。現代に生きる私たちが星空を見上げているのと同じように、私たちの祖先も、星空を見上げていたでしょうし、私たちの子孫もまた、星空を見上げることでしょ。もちろん、その時代時代によって、人々を取り巻く環境や価値観は異なります。とはいえ、私たちが身ひとつで星空と相対する時、そこに大きな違いがあるようにも思えません。星を見上げている時、私たちは過去や未来の人々と、時間を超えて同じ感覚を共有しているかもしれない。そのように考えると、なかなか感慨深いものがあります。

…これは特に日本に顕著なことであるらしいが、星空にポジティブな感覚を抱くのは、特異なことかもしれない。わずかな灯りでしか夜を照らせなかった時代において、人々の運命を指し示しているらしい星空は、素人が徒手空拳で立ち向かえる相手ではなかった。畏れ敬う対象であって、慣れ親しむ対象ではないのだ。闇夜に妖しく輝く星々の下で、無事に朝を迎えられることを願っていた人も多かろう。未来だって、現代の私たちの感覚と近くあるかは怪しいものだ。科学的な理解がずっと進み、宇宙の時計仕掛け具合が明らかにされてしまった時に、星に特別な感慨を抱くことはできるのだろうか。この宇宙が在ることへの問いは変わらず残っていたとしても、それは星空に限る必要がある話ではない。星空に特別に心動かされることがなくなったとしても、おかしくはない…

星を眺める時の感覚は、時間だけでなく、空間をも超越しているかもしれません。これは、地球上のさまざまな場所でそれぞれに星空を眺めている人たちとの共感のことだけを指して言っているわけではありません。最新の天文学の研究によれば、この広い宇宙の中には数え切れないほどの惑星があることは疑いようがない事実となりつつあります。その中には、これはまだ発見には至っていませんが、私たちの住む地球と同じように生命を宿す惑星も少なくないでしょう。彼らもまた、星空を見上げ、なにごとかを感じているに違いありません。そして、それはおそらく、この宇宙に同じように存在する者として、そう遠くない感覚なのではないかと思ったりするのです。この瞬間に、地球ではないどこかの誰かも私と同じように星を見上げ、そして同じようなことを考えているかもしれないのです。

…希望としてそういった考えがあることを否定はしないが、この宇宙に惑星が多数あるからといって、そこに生命が存在している証明にはならない。みんなと同じように星を眺めているつもりが、実は自分ひとりだけだったということもあり得るだろう。私たちは、いや、私は広大な墓場の中で、ひとりさまよっ

ている盲目の生者なのかもしれない。その哀しみに気がつかず、星を眺めているのはあまりに無邪気に過ぎないか…

閑話休題。星を眺めるということに、なにか正しいひとつのやり方があるわけではありません。ただ素朴に楽しむのもよし、思いっきり拗らせてみるのもよし。それぞれの人にあった眺め方があり、味わいがあります。この多様性が放つ魅力こそが、私たちが星を眺めることに拘って活動をしてきた理由だと言えるかもしれません。

「月をこそながめなれしか 星の夜の 深きあはれを こよひ知りぬる」とは、建礼門院右京大夫の詠んだ歌。月には慣れ親しんでいたけど、星の味わいに今晚初めて気がついた、という意味になるでしょうか。ある日突然に星のあり方が変わったのではなく、彼女の心境に変化があって(この場合は恋人の死)、はじめて星の新しい味わいに思い至ったのです。つまり、星は彼女自身を映し出す鏡であったと言えます。

私たちは星を眺めているつもりで、実は自分自身のありようを眺めている。そのように考えた時、星を眺めることはより普遍性を持って、腑に落ちるよう感じます。この広大な宇宙のどこかで共に生きとし生けるものたちが、星空にどのような自分を見ているのか。その「深きあはれ」に想いを馳せながら、今宵、星を眺めてみるのもいかがでしょうか。

キセキのその後

高橋 元氣

日本経済新聞

2019年5月、「キセキの高校」と題した5回連載の記事を日本経済新聞に掲載した。東京都立大山高校での哲学対話の実践を扱った記事は、日経では珍しい題材にもかかわらず、多くの読者の反響を呼んだ。

連載の主人公は、哲学対話を経験した大山高校の生徒や卒業生だ。掲載から2年半が過ぎ、その歳月のほとんどは新型コロナウイルスの感染拡大の時期に重なる。「あの若者たちは今どうしているのか？」梶谷真司先生から冊子への寄稿依頼を受けたとき、真っ先に浮かんだ問いである。

大学に通っている若者も、就職した若者も、コロナ禍で困難を抱えている可能性がある。私は「キセキ」の若者たちに、当時交換したLINEで連絡を取り始めた。

まず仲浜美海さん。16年秋、大山高校で初めて開かれた哲学対話の経験者である。翌年に卒業し、沖縄県立芸術大学に進んだ。大山高校から公立大学への進学者は、30年ぶりの快挙と言われた。

私は連載の終了後、2020年3月14日に美海さんに会っている。その日、彼女は池袋の沖縄料理店「みやらび」で伝統楽器の三線を弾く予定になっていた。沖縄音楽を学ぶために芸大を選んだ美海さんが故郷に凱旋する。報せを受けた私は喜んで店を訪れた。

20年3月といえば新型コロナの最初の拡大期に当たる。店は参加者の人数を絞り、検温や消毒を十分にした上で美海さんの晴れ舞台を挙行した。沖縄の伝統舞踊の名手である彼女の祖母との共演は、閉塞感が広がっていた日常にひとときの安らぎを与えてくれた。

それから1年8ヶ月。「いろいろあったんですよ」。画面の向こうの美海さんは、大きく息を吐いてから話し始めた。

池袋での舞台を終えた彼女が20年4月に沖縄に戻ると、1ヶ月前はゼロだった感染者が増え始め、警戒感が広がっていた。「こんな時期に東京から帰ってきてしまった」。彼女は自分がウイルスを周囲に広げてしまうのではと案じ、アパートの自室にこもるようになった。もしものことを考え、コールセンターのアルバイトも長期間休んだ。

大学はオンライン授業となり、レポートの提出に追われる日々が続く。周囲に家族はいないし、友人とも会えない。一人きりで過ごす日々は夏を終えても続いた。教員が「大丈夫？」とメールで問い合わせてくると、彼女は「大丈夫です」と答えた。

本当は大丈夫じゃなかった。孤立に押しつぶされそうになりながら、彼女が「大丈夫」と返すのには理由があった。大学進学にあたり、「沖縄で何かを得てから東京に帰る」と決めていたのだ。

その決意も苦しかった。望んで入学したはずの大学だったが、専攻した音楽文化コースは座学が中心。美海さんが求めていたはずの、伝統音楽を実地で身につける機会は少なかった。彼女は2年前の取材でも「学びたかったこととのギャップ」に戸惑っていた。モヤモヤが続いていたのだ。

美海さんが外に出始めたのは20年11月になってから。沖縄でできた友人が声をかけてくれた。男女数人で海までドライブするなど、学生らしい日常が少しだけ戻った。しかし12月に帰京し、沖縄に戻ると感染増のニュース。「今度こそそうってしまうのでは」。葛藤の日々が再来する。21年4月に卒業するはずだった大学は留年することにした。

転機が訪れたのは23歳になった21年8月15日の誕生日。東京で彼女に三線の手ほどきをしてくれた師匠の訃報が届いた。芸大への進学を喜び、応援してくれた師匠の死は、美海さんに自らの原点を思い起こさせた。

「三線を学び直そう」。私がオンラインで話を聞いた21年11月、彼女は沖縄芸大に再入学し、三線を極める道を探っていた。演奏をオンラインで配信する活動も始めていた。少しずつ歯車は回り出し、飲食店でのアルバイトもできるようになった。演劇のプロデュースなど新しい活動にも関心を広げている。

コロナ禍は彼女にとって何だったのか、問うてみる。「コロナの前は、実家で演奏するとか、舞台上に立つとか、具体的な目標に向かうことでモチベーションを保つことができた。そういう目標が失われてしまった時、何を目標にすればよいかわからなくなった。単に大学の課題をこなすのは苦でしかなかった。……今は人との関わりができたことで、楽しい。仲間って大事だと思う」

私は彼女が絞り出した言葉から、パンデミックの爪痕の一端と、もがきながらも未来をつかもうとしている若者の姿を見た。

「ストレスがすごいんですよ」。沖縄の美海さんに話を聞くのと前後して、私は菅頭知哉君に会った。同じ西武池袋沿線に住む縁で、石神井公園駅で待ち合わせる。彼はいきなり私にそう告げた。

菅頭君は連載時に東洋大学1年生で、公務員試験の合格を目標に掲げていた。大山高校の在学時は哲学対話の常連で、記者をハッとさせる問いを投げかけてきた印象が残る。その彼から発せられた「ストレス」という言葉が気になる。石

神井公園の紅葉の下で話を聞いた。

昼寝もできない。目を閉じると心臓がバクバクいう——。東洋大法学部3年生になった菅頭君は、22年5月に迫った公務員試験に向けて猛勉強に励んでいる。試験は憲法、民法、経済学、一般教養、数的処理など多くの科目がある。「覚えなきゃいけないことが山ほどあるんです」。1年生の頃からほぼ毎日、池袋にある公務員試験の専門学校に通い、1日の勉強時間は10時間に及ぶという。試験合格へのプレッシャーから昼寝もできず、気晴らしに本を読もうとしても「この本が試験の役に立つのだろうか」と考えてしまう。

コロナ禍もストレスを増す方向に働いているようだ。文京区のキャンパスには感染拡大後、通算で30日も通っていない。行政学や地方自治を学ぶゼミもオンラインが中心で、友人のつながりはできにくい。趣味だった鉄道旅行も封じられた。試験やコロナのため、「旅行に行っても全力で楽しめない」と思ってしまう。

どうしてそこまで自分を追い込むのか？ 私が問うと、菅頭君は少し考えてから話し出した。「ストレスって、マイナスだけじゃないんです。ストレスがあるおかげで勉強のエンジンもかかるんです」。なるほど。でも、公務員試験に合格しようという強い動機はどこにあるのか？

彼は今、東京都庁の職員になるのが第一希望だという。「都庁は広域行政に関わるのが魅力。港湾やダム管理から教育まで、2～3年のスパンで様々な仕事に関われるのもいい。いろんな部署に飛ばされることで、別の視点を獲得することができる。それって、哲学対話に似てると思うんです」

「飛ばされる」ことをポジティブに捉えるのは独特の考え方だ。哲学対話という単語も出たので、私も問いを重ねる。それって、民間の仕事じゃいけないの？

「公務員は公正中立の立場じゃないですか。町おこしにしても、例えば漁業者なら漁業というスペシャリストの視点で参画する。でも公務員は全体の安定を確保する立場。安定を作り出すのも、一つの進化だと思うんです」

対話を重ねているうちに、私は彼の発するユニークな言葉に引き込まれていった。「コロナと試験が終わったら、しまなみ海道を自転車で走りたい」。そう言って笑う彼と別れる頃には、菅頭君の一途さに胸を熱くしていた。

上智大学キャンパスの2号館5階。サンドイッチの「サブウェイ」が併設された学食で、社本理江さんと向かい合う。19年4月の取材時と同じ場所だ。しかし21年11月の今は、彼女との間にアクリル板が立っている。銀杏並木が美しいキャンパスが学生に開放されたのも、ようやく最近になってからだという。

社本さんが大山高校から上智大学英語学科に進んだ成功譚は「偏差値40から上智大 頑張れたのはなぜ」というタイトルで連載の初回を飾った。当時2年生だった彼女は、卒業後の進路として旅行ガイドやキャビンアテンダントを挙げ

ていた。両方ともコロナで大打撃を受けた職種だが、就職は大丈夫だったのか？

「待ってられない性格なので、切り替えたんです」。彼女は内心心配していた私をよそに、快活に話してくれた。就職先はインターネット広告を営む国内の企業に決めた。若い社員が多く、会社の「燃えている感じ」が魅力的だったという。

副業がOKという会社の条件も決め手になった。社本さんは英語力を生かし、学生時代に独立ツアーガイドのアルバイトを経験している。日本にやってくる観光客に、自らが立てた旅行プランを提案し、実際に案内役を務める仕事だ。就職後も会社の仕事にとどまらず、自らの能力を生かせる副業に取り組みたいという。

「興味のあることは他にもたくさんあるんです」。彼女は英語だけでなく、韓国語も上智大の上級クラスに入るほど上達したという。社本さんは母が韓国出身のため、ハングルは自らのルーツでもある。コロナ禍の直前に短期留学で滞在した米アトランタ市には全米有数のコリアンタウンがある。「将来はあんなところでも働いてみたい」。彼女は様々な能力を開花させ、未来に複数の選択肢を持っていた。

選択肢の一つには、哲学対話も含まれる。彼女は大学がオンラインになって生まれた時間を使い、母校の大山高校や実践学園（東京都中野区）で英語を教えたり、哲学対話のアシスタントをしたりしているという。

「将来は教育の仕事もしてみたい。そこで哲学対話の経験を生かしたいんです」。私は彼女の言葉に、コロナ禍の希望の灯をみた。自ら問いを立て、考える。新しい問いが浮かぶことで、人生が変わっていく。私が連載で読者に伝えたかった営みが、若者によって将来に継承されていく光景が目に浮かんだからだ。

キセキの物語はこれからも続く。

哲学対話で地域をデザインする

田阪 真之介

NPO法人グローバルアカデミー理事/創業者

私が「哲学対話」という言葉に出会ったのは2013年12月、熊本空港だった。

当時、私は東京の教育関連企業に勤めていた。2014年4月から宮崎県高千穂町に移住する予定だったので、その準備で羽田空港と熊本空港を何度も往復していた時期だった。なぜ、熊本空港を利用していかというと、高千穂町は宮崎空港より熊本空港の方が断然近いからである。

友人である南阿蘇で農家をしている大津愛梨さん(NPO法人田舎のヒロインズ)に、(偶然すれ違った)梶谷先生を熊本空港で紹介してもらったのが、全ての始まりだった。最初の出会いは5分程度だったと記憶している。その時に初めて「哲学対話」という言葉を聞いた。私にとって、良い意味で違和感があり、ワクワクする言葉だった。「哲学」と「対話」。今までの人生で意識しなかった言葉のコラボレーション。私の脳みそにそれはしっかり刻まれた。

次にその言葉と出会ったのが、年明けの2014年1月。東大で大津愛梨さん、梶谷先生、私の3人で会う機会があり、哲学対話の詳細を梶谷先生から聞いた。その時、私の中で「ビビビ！」と直感が降りてきた。ちょうどその頃、私は宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校から文科省のスーパーグローバルハイスクール事業(SGH)に申請する際に必要な連携先の大学や教育手法の相談を受けていた。詳細の説明は省くが、私の中で「connect the dots」が起こり、五ヶ瀬の先生と梶谷先生をすぐに引き合わせた。申請書に東京大学共生のための国際哲学研究センター(UTCP)と哲学対話も盛り込ませていただいた。ちなみに私はこの時点で一度も哲学対話を経験していない。SGHの1期目と言うこともあって、高倍率だったが、無事に採択された。2014年1月から3月に起こった出来事は、今でも鮮明に覚えているし、私の現在の活動の原点になっている。

ここからは五ヶ瀬への導入後について説明したい。私は高千穂町に移住してすぐに教育関連のNPOを起業した。NPOへ強いこだわりがあったわけではなく、ビジネスの世界が長かったので、他の形で仕事をしてみたいという好奇心からの起業であった。ちなみに現在は高千穂町で、株式会社とNPO法人、大学教員(宮崎大学)の平行ワーク・テレワークの形で仕事をしている。

さて、時計を2015年12月に戻そう。私の住む高千穂郷・椎葉山地域(5町村:高千穂町、五ヶ瀬町、日之影町、諸塚村、椎葉村)は2015年12月に世界農業遺産(Globally Important Agriculture Heritage Systems: GIAHS)の認定を国際連食糧農業機関(FAO)から受けた。この認定の最終審査がローマのFAOであった。最終審査のプレゼンは、前半を宮崎県の河野知事、後半を五ヶ瀬中等教育学校の生徒が行った。県庁から、その生徒のプレゼンに関するサポート全般(プレゼン資料やシナリオの作成、プレゼン指導等)の依頼が起業したNPOにあり、そこが起点となって、GIAHSに深く関わるようになった。というのも認定をきっかけに、GIAHSを活用した地域の教育・人材育成に力を入れたいと思っていたからである。幸いにも産学官のキーマンが同じ志だったため、想定より早く、スムーズに形ができた。

2017年に世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域活性化協議会(GIAHS協議会)と宮崎大学、高千穂高校の三者で連携協定が結ばれ、GIAHSを学校教育と地方創生に活用する枠組みができ、「GIAHSアカデミー」という地域協働学習がスタートした。GIAHSアカデミーでは、GIAHSを活用した様々な教育を展開しているが、その中でも力を入れている活動が2つある。1つは高校生が地元の農家に取材して、それを「高千穂郷食べる通信」という有料の情報誌で記事として発信する活動。もう1つはGIAHSアカデミーで学んだことを地元の小中学生等に出前授業を通して伝える活動。これまで参加した人数は4,000人を超える。これらの教育活動の中で、随所に哲学対話を導入している。2017年8月に実施したGIAHSアカデミーのキックオフイベントでは、梶谷先生をはじめ、UTCPの方々に高千穂町まで来ていただき、哲学対話を行った。また、地元の中学生を200人以上集めて2020年1月に実施した「GIAHS中学生サミット」では、地元の大人や高校生も巻き込んで哲学対話を行った。これらの影響もあり、私の住む地域では哲学対話が特別なものではなく、当たり前になりつつある。宮崎県全体にも広がりを見せており、2019年8月に宮崎県教育委員会(宮崎県キャリア教育支援センター)主催の「中学生キャリアフォーラム」の中で哲学対話を実施し、好評だった。

ここまでは哲学対話と私の出会い、そしてそれが地域にどう広がったのかを説明してきた。最後に私が考える哲学対話の良さを皆さんに伝えたい。私は哲学専門ではなく、これまで対話を重視してきた人間ではない。そんな私も哲学対話に魅了された。いや、魅了という言葉は少し違うか。「相棒」という言葉の方が適切だと思う。私が地域を教育分野からデザインする時に共に歩んだ相棒、それが「哲学対話」である。

1つ目は「予定調和」を崩すことができる、である。地方、宮崎の学校教育は、児童・生徒が先生の期待にしっかり応える(疑いを持たない)という意味ではうまくいっている。しかし、それだと現状や常識を疑う姿勢や批判的思考(critical

thinking)は身につかない。このような予定調和を良い意味で崩すのに、哲学対話は非常に有効である。実際、私は何度も生徒の中で予定調和が崩れる場面を見てきた。適切なルールの元、安心できる環境で、問いに対して思考し、対話することで自然な形で予定調和が崩れていく。

2つ目は「実施が容易」である。ルールを理解し、ある程度体験を重ねれば、参加者からファシリテーター側になれる。GIAHSアカデミーでも最近の小中学生向けの哲学対話では高校生がファシリテーターとして活躍している。

3つ目は「単純に楽しい」である。当たり前だが、人間は思考が大好きだ。また、思考したことを他人にしっかりと聞いてもらいたいと思っている。それを実現できる手法が哲学対話である。しかも多世代交流の中で。

これからの地域活性化を考えた時に、多様な関係者が立場や価値観を乗り越えて、対話することが重要である。対話をして他者を理解し、尊重する。その先に新しい地域のカタチが見えてくる。そのカタチをデザインするために私はこれからも哲学対話を相棒に挑戦していきたい。

高千穂町の価値ある暮らしを次世代へ

田崎 友教

高千穂町役場総合政策課 主任主事

私が住んでいる宮崎県高千穂町は、阿蘇山の噴火の影響を受け長い年月をかけ形成された、独特で豊かな自然景観を有し、神話と伝説が色濃く残る町である。新型コロナウイルス感染症が拡大する以前は毎年100万人以上の観光客が訪れる、九州を代表する観光地として広く知られている。高千穂町を代表する観光スポットと言えば高千穂峡であるが、その他にも高千穂神社、天岩戸神社、天安河原、荒立神社、神楽、国見ヶ丘、アマテラス鉄道など、高千穂町ならではの観光スポットやアクティビティがある町である。

また、高千穂町は山林の面積が83%を占め、山々に囲まれ平地が少なく、農業を営むには厳しい条件ではあるが、先祖代々にわたって脈々と農林業を営み続けてきた。その農林業と、伝統文化、食文化、生物多様性、景観などが高く評価され、高千穂郷・椎葉山地域としてFAO(国際連合食糧農業機関)から世界農業遺産(英語名称「Globally Important Agricultural Heritage Systems」、頭文字をとって以下GIAHS、ジアス)の認定を受けている。GIAHSは目に見えない無形の農林業システムを評価し、時代や環境の変化に適応しながら、次世代に継承していくことを目的としている。また、GIAHSは時代に合わせて進化・変化していく「生きている遺産」とも言われ、その観点から有形の不動産を認定する世界遺産とは似て非なるものである。私達の地域が認定される際に最も評価された点は、厳しい中山間地ながらも持続可能な農林業システムを営んできた「人と人の繋がり」であり、高千穂郷・椎葉山地域に住む人々の営みがあってこそその認定であった。言い換えれば、高千穂町の暮らしそのものが、国際的かつ学術的に世界から認められた証であると言える。

そのようにGIAHSの認定を受けるなど、国際的にも高く評価されている町ではあるが、様々な課題にも直面しているのも事実である。その最たるものの一つが人口減少である。高千穂町の人口は令和3年11月時点で11,671人であるが、1980年以降、年平均で約200人のペースで減少を続けている。また、65歳以上の高齢化率は43%であり、近い将来に50%を超える予測となっている。これらの影響を受け、GIAHS認定の核となる農家の戸数も減少し、2020年時点では1328

戸となっているが2010年の1637戸から約2割減少している。さらに、農業分野での高齢化も進み、農業従事者の平均年齢は67歳を超えている。

これらの人口減少や少子高齢化という事象を全て解決することは困難だと思われるため、これらはもはや解決すべき課題ではなく、これからの高千穂町が直面する前提条件として考えるべきである。そのような前提条件がある社会において、世界から認められた高千穂町の価値ある暮らしをどのように受け継いで行くのが今まさに問われている。

その問いに対しては様々な角度からのアプローチが考えられると思うが、GIAHS認定後に私たちの地域で特に力を入れて取り組んでいるのが人材育成である。人口減少や少子高齢化の時代においても、世界から認められた価値ある暮らしを次世代に引き継いでいけるかどうかは、やはりその地域に住む人々の考えや行動次第だと考えるからである。そこで、GIAHS認定を受け、世界から認められた地域の価値をまずは地域内の住民、特に若い世代に伝えようと、地域内向けのプロモーション活動を始めた。GIAHSに認定されるということは、高千穂町にある暮らしは世界から見て価値のあるものだという証である。しかし、その暮らしはそこに住む人々にとっては当たり前のもの過ぎて、価値のあるものだと捉えられておらず、過小評価されがちである。そのような認識を変えるために、「当たり前が当たり前じゃない」を合言葉に、若い世代に向けた教育プログラムに取り組んでいる。

そのプログラムが「GIAHSアカデミー」である。地元の高校生が主体となり、GIAHSを学ぶことを通して、地域に対して自信と誇りを持てる人材の育成を目指すプログラムである。GIAHSをテーマに地域の価値の再認識・再発見の場づくりを行っている。

GIAHSアカデミーでは、有志の高校生達が地域の農家への取材活動を行い、地域の人から農業やGIAHS地域に住む魅力を聞いたり、直面している課題など生の声を聞いたりする活動をしている。その取材した内容を「食べる通信」という雑誌を中心とした様々な媒体で情報発信をしている。また、その高校生達が地域内の小中学校を訪問し、高校生による出前授業として、GIAHSの魅力や課題について授業を行っている。小中学校を中心に様々な機会に出前授業を実施し、これまでに延べ約3,000人の前で高校生がGIAHSについて授業を行ってきた。このように、高校生達がGIAHSに認定された地域に飛び出し、主体的かつ創造的な学びを行ってきた。

また、国内外の大学に通う日本人大学生を招き、地元の高校生達と一緒に2泊3日でGIAHSについて学ぶ「GIAHSスタディツアー」も開催している。参加した高校生の感想に「今まで生きてきた中で一番充実した3日間でした」という感想もあり、地方(ローカル)に住む高校生と国際的(グローバル)な視野と経験を持

つ大学生が、GIAHS地域で3日間を共に過ごすことで、強力な化学反応が起きていたと思われる。さらに、地域内の中学生や高校生達が一堂に会し、GIAHSをテーマに交流する「中学生サミット」も開催してきた。お互いの学習の成果を発表する場でもあり、200名以上の生徒達が哲学対話を行うなど、他校の生徒との交流の場となっている。このGIAHSスタディツアーと中学生サミットは、現在は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け開催できていないが、いずれは再開したいと考えている。

このような活動を続けてきて数年が経ち、少しずつではあるが成果も出てきている。GIAHSアカデミーの活動に魅力を感じ高千穂高校に入学するという生徒も出てきたり、世界農業遺産をフィールドにした五ヶ瀬中等教育学校の研究活動が国の事業の採択を受けたり、地域内の小中学校でもGIAHSを取り上げられる授業も行われたりするようになってきた。GIAHSの認定がきっかけで、GIAHSをテーマに地域を学ぶ新たな取組が生まれ始めている。

高千穂町が行ったアンケートでは、町内の中学生の約3割がGIAHS認定を誇りに思うと答えている。これは、高千穂町の暮らしに対して当たり前が当たり前じゃないと感じ、誇りに思う若い世代も増えてきているものと思われる。しかしながら、まだ3割の生徒達のみが誇りに思っているだけで、残りの7割の生徒達には、GIAHSの価値が認識されていないとも捉えることもできる。人材育成の事業においては、本当の成果が確認できるまでにはそれなりの時間がかかるため、今後も地道な活動を続けて行くことが必要である。世界から認められた高千穂町の価値をより多くの人達が認識し、先祖代々受け継がれてきた高千穂町の暮らしが、またさらに次世代に引き継がれていくように、行政職員として、またGIAHS地域に住む住民の一人としても、取組を推進していきたい。

カメラを持って、回して、そこにいる

田中 悠輝

映画監督／NPO法人もやいスタッフ／ヘルパー

「俺が生きている意味とか価値ってのはあるんやろか？なあ、田中さんどう思う？」

これは私が北九州にあるNPO法人「抱樸(ほうぼく)」で生活困窮者支援の仕事をしていた時に、あるおいちゃんから問われた言葉だ。生きる意味や価値について「ある／なし」の二分法で答えるのはどうなんだろうかと個人的には考えているが、出会ってきた人に問われて、あえて答えるのであれば「ある」と言いたい。そんな言葉は幻想かなかだとしても、そうやって心の助けになるのであればそう言いたい。でも、20代そこそこの若造が自分よりも長く生きてきた人にそんなことを言っても説得力を持たないだろうし、経験的にいってもそうだった。やはりなんらかの形で実感を持たせることができなくてはいけない。私はこの問いにどんな返答ができるだろうか。

<わたしがカメラをもつ理由について>

そんな葛藤の中で当時の私がたどり着いた一つの答えがカメラで記録を撮ることだった。その人のかたわらにいて「あなたにはこんなに輝けるときがある。おもしろい時がある。やっぱり意味とか価値はあったんじゃないの？」、そのことをうつつしてみせること、これが一番わかりやすい方法なのではないかと考えた。カメラを手にしたはじめの頃はこんな高尚なことは考えていなかった(正直に言うと今もそんな高尚なことを考えながら撮っているわけではない)が、そんなふうを考えるきっかけになった出来事がある。

北九州の「抱樸」で仕事をしていた頃、イベントがあるとしばしば記録写真を撮っていた。ある写真を“元ホームレス”のおいちゃんに見せた時のことだ。「よく撮れてるやん。ありがとう、遺影にするわ」と言われた。おいちゃんたちが冗談まじりによく言うセリフなのだが、当時の私はこの言葉に気をよくして、写真を撮り続けていた。今思えば、この言葉は重い言葉だ。その人が生きた証を私が撮って(しまつて)いる。なかなか責任重大である。そんな大役をぬるっと仰

せつかつてもなあと思いつつ、それまでそのようにして写真の一枚も撮られたことのなかった人がいる、ということがカメラを持ち続ける動機になっていた。

そんな関心も手伝ってか、縁あって映像作家・鎌仲ひとみさんのもとで仕事をすることになり、ひょんなことから障害者のヘルパーとして働くようになった時もカメラを持っていた。「俺たちの活動を撮ってほしい」と、自立生活センターSTEPえどがわ・理事長の今村登さんは私をヘルパーの仕事に誘った。ヘルパーをしながら手の空いた時間に自分たちを撮ってほしい、と。そんなことから私の初めて製作したドキュメンタリー映画、『インディペンデントリビング』は生まれた。映画は大阪に暮らす障害者たちの自立生活を追いかけたものだ。

写真も素人なら映像をとるのも素人。製作は困難を極めた。「やべえ、映画のつくりかたわからねえ」と何度も頭を抱えた。そんな中でも、製作中ずっとお世話になっていた大阪の自立生活夢宙センター・代表、平下耕三さんに「ユウキならできる、ユウキにやってほしいねん」と背中を押され、暗中模索の果てにできあがったのがこの映画だ。いまの自分から見れば、いろんな反省があるが、その時の自分にしか撮れないものが映っているし、なにより一緒に映画をつくってきた障害当事者たちから「これは俺ら（私たち）の映画や」と言ってもらうことができた。私は健常者として生きてきて、四六時中映像に撮ってきた人たちのことを考えていても、彼らの思いや考えをどれほど理解できているかはわからない。それでもつくってきた作品が「これは自分たちの物語だ」と彼らに受け入れてもらえたことは本当にうれしかった。困難は本当に多かったが、カメラを置かずにきてよかったと思えた。

<カメラを持って、回して、そこにいる>

現在、私は生活困窮者などを支援する認定NPO法人「自立生活サポートセンター・もやい」というところで相談員をしながら、映像製作、時々ヘルパーという塩梅で仕事をしていて、ケアワーク（生活困窮者の相談支援、障害者のヘルパー）と映像製作が仕事の両輪になっている。実際的な人の生活に関わる仕事と、生活から離れた幻想のようなものをつくる仕事。一見、相反するような仕事だが、どちらも人間の情緒や感情を相手にしているという点においては同じだし、人間が生きていくのに必要なものだという実感がある。人の人生に介入することと外側から眼差ざしを向けること、欲ばりにその両方に関わろうというんだから矛盾をはらむことも多々ある。ヘルパーや相談員として現場に入ってもこの場面はどのように映るかを考えてしまうのは脳内メモリの無駄遣いのような気がするし、カメラを持っていてもなまじ生活に入り込みすぎていて、しんどすぎて撮れない場面がある（という割に白々しく撮影を続けられて

いるのは自分のプロ意識からだと思いたい)。でも、そんな謎の気苦労や回り道をしてやめられないのは、それが“おもしろい”からだと思う。映画も「大変だ、大変だ」とばかり書いてきたがやめられなかったのは、映像やカメラを介して“おもしろい”人との出会いがあったからだ。

北九州時代のボスである「抱樸」理事長の奥田知志さんはかつて私にこう言った。

「本当の出会いとはそれまでの自分を死に至らしめるような出会いだ。そんな出会いをしなさい。」

この人は本当にしんどいことばかり言う。とても本質的で含蓄があるがゆえに重い。でも、面白い。当時の私はこの言葉の意味にピンときていなかったが、今考えてみるとたしかに幾人かの人との出会いは、それまでの自分を死に至らしめ、新たな自分として生き直させるようなものだった。障害者のあの人とともに歩く自分や、“元ホームレス”のこの人とともにある自分は、出会う前の自分とは違っている。現在の私は出会ってきた人たちやその言葉によってあたえられた変容の先につくられてきた。そしてこれからもおそらく、「面白そうだから」と軽々に関わりを持って、しんどい目に遭っては「あかんかったなあ、自分」と自分を死なせては生き直していくことになるんだろうと思うが、その先にあるのにおいちゃんからの問いにそれっぽいことを答えられる自分がいるのではないかと期待している。ただそれまではまだカメラを持ってウロウロしなければならないのだと思う。

■プロフィール

田中 悠輝(たなか ゆうき)

映画『インディペンデントリビング』監督

認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやい コーディネーター

自立生活センター STEPえどがわヘルパー

未来バンク理事

1991年東京都生まれ。2013年から福岡県北九州市の認定NPO 法人抱樸(ほうぼく)でホームレス支援にかかわる。2015年に東京に戻り、翌年から自立生活センターSTEPえどがわでヘルパーとして働く。同年、鎌仲ひとみ率いる「ぶんぶんフィルムズ」のスタッフとなり、映画『インディペンデントリビング』を製作(現在はフリーランス)。2017年から認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやいでコーディネーターとして勤務。2018年から日本初の市民(NPO)バンク「未来バンク」理事。

八丈雑記

寺尾 紗穂
文筆家・音楽家

空港でまちあわせのロビーに私は大分先に着いていた。加納穂子さんと八丈島でのトーク配信のために、梶谷先生と中里先生、撮影助手の高山さんと羽田空港の八丈島行き搭乗口のロビーで待ち合わせということになっていたのだ。近くの席に先生方と思われる人たちが集まってきて会話をしている。おそらくそうだろうな、と思いながら、全員が集まったころ、私は顔をあげた。

「気づかなくてすみません」

おそらく中里先生だった。一度渋谷の喫茶店で一時間以上打ち合わせをしたはずだけれど、私は人の顔を覚えることが得意ではないので、二度目に会う人でも初めて会う人のように感じたり、え、この人こんな雰囲気の人だったっけ、と一人で動揺することが多い。先生に謝られたけれど、私は彼らの到着に気づいていないふりをしていたので、自分が人でなしのような気持ちになった。そばにいた梶谷先生がフレンドリーに話しかけてきてくださって、久々に会う風通しのいい感じの方だな、という感覚を持った。高山さんは第一印象はおとなしそうな、でも面白そうな方だった。飛行機の席が隣で色々話をきくと、歌について哲学的に考えるということがご専門の一つのようで興味深く、曲が生まれる時の話などをしてしているうちに八丈島に着いた。

空港に迎えに来てくれた穂子さんは真っ黒に日焼けして、少しはにかんだ笑顔が似合う人だった。「普段山羊も載せている」という穂子さんの車は、中国の一人旅の時でさえ乗ったことがないくらいぼろぼろで、そこに乗り込めたことは完全に貴重な体験であった。穂子さんが「よげごん」の仲間と育てている鶏たちの小屋に連れて行ってもらい、グアバのおやつをついばむ鶏たちに紛れて楽しい時間を過ごした。

今回の旅のハイライトは私にとっては二つあって、一つは到着日の夜に穂子さんのお宅で、おいしい八丈料理をいただきながら、皆がそれぞれの家族の話始めた時間だった。特に、経済的にも恵まれ、不自由な家庭にそだった中里先生のお父様への複雑な感情を聞きながら、家族というものの距離の近さゆえの精神的な関係のもつれについて考えた。家族との不和、という問題は世間

に割とありふれていながら、「家族について良い感情を持ってない」という事実は、当人にとっては長期にわたって見過ごしえない重たさを持つ。聞けば穂子さんのお母さんに対する気持ちも長らくそうであって、お母さんの介護と死別を経て、穂子さんの中では何かが溶けていった一方で、お兄さんはやはり割り切れない思いを抱いていたという話を翌日のトークでも聞くことができた。

この穂子さんとのトークと同時期にもう一つのオンライントークをした相手が、韓国のイ・ランというシンガーソングライターだった。機能不全家族の中で育った彼女は、元凶である父親を憎み、容易には抜け出しえない悲観主義を生きていて、私より少し下の年齢だが、子どもを持つことは考えられないと公言していた。お父さんのDVにお母さんが現在進行形で被害を受けているが、経済的な問題から別れることはできず、若干相互依存もあるのだろうか、家庭が続いているらしい。そのイ・ランの姉が、12月に自殺をした。

イ・ランはトークのとき、「朝起きたら何をする？」と質問してきたので、「ペランダの花に水をやる」と答えた。すると、「花たち、みんな生きたくないと言っているでしょう？」と答えが返ってきたので私は返す言葉を一瞬失った。そして自殺したイ・ランのお姉さんにも、花はそんな風に悲しげな色に映っていたのだろうか、と思った。花のあるがままの美しさを感じる感性を壊し、麻痺させるほどの悲しみを私は知らない。それが癒える日が来ると信じたいけれど、容易な道ではないことも想像がつく。ただ私は想像する。幼い日のイ・ランが花壇の色とりどりの花に吸い寄せられるように近づき、喜びを感じた日のことを。喜びを喜びとして受け止める子どものイ・ランに、イ・ランはもう一度出会うことができるだろうか。ただただ、その日が訪れることを、祈る。

話が逸れたけれども、初日のこの語り合い、聞き合う夜は、「明日のオンライントークはこれをそのまま流せばよいのでは」と思われるほどに、いくつものストーリーが行き交い、感情が吐き出され、共有されていた。ゲストであるとか、スタッフであるとか、そういうことと全く関係なく、人はひとしく家族がいて、その数だけストーリーがあり、それぞれに抱えている思いというものがあるのと改めて強く印象付けられた夜だった。

もう一つのハイライトは、配信中の終盤、私が“すべてのものには命があり、「快」の状態、健やかな状態で命が輝くということが幸せということであり、その意味においてすべて命は同じではないか”というような話をしたときのことだった。きっかけは穂子さんの「人も鶏も同じ」という発言だった。穂子さんの島の生活の実感から生まれた素敵な言葉だと思った。そんな話を継いで、中里先生が「命が輝いていることを感じるには自分の気持ちも幸せで明るくなければいけないんですね、そうでなければ感じ取れない」ということをおっしゃって「それまで気づけなかったのに、ある時こんなに道の花が美しかった

のか、と気づいた」と、ご自身の心境の変化によって、身近な自然の美しさに気づくことができた経験を語られ始めた。不思議とイ・ランの発言ともつながっている。私は、静かに感動した。いわゆるアカデミックな立場で難しい単語を使って論文を書かれる人に、「命はみな同じ」「命が輝くことが大事」という、あまりにもシンプルでちょっとふわふわとした手触りの話がずっと伝わったということが、とても嬉しかった。少し前の「戦争社会学会」のオンラインでの発表の中で、似たような形で、いくらか大雑把な詩的な表現を投げかけたことがあったが、誰も拾ってくれる方がいなかったことがあり、アカデミックな場でこのような言葉はやはり場違いか、と淋しさを感じたことがあった。

中里先生の中に、詩的な感性が根付いていることと、先生が二足のわらじのような形で福祉の現場にも足を踏み入れていらっしゃることは無縁ではないように思えた。一人に向き合い、一人の物語を感じ取る力こそ、詩を生み出したかのように感じたりする時に必要なものだ。アカデミックな論文の中で、時に一人の存在が埋れてしまう一方で、福祉の究極の理念は「一人もとりこぼさない」ことでもある。

シュタイナーは理想について次のように書いている。「現代の文化の中には、理想主義と呼ばれるものはほとんど存在しません。そして人間の言葉は少しずつ、外にある物理的かつ物質的な事物に関わることを表すようになりました。言葉が理想主義的なものを表すためには、人間が霊的なものを信じていることが前提になります。なぜなら、理想とは霊的なものだからです。しかし現代では、言葉は理想主義的なものの表現からますます遠ざかっています」(『天使と人間』)。あの日の八丈島「よげごん」でのオンライン収録の場で、私が中里先生の言葉に感動したのは、人や生き物をとらえるまなざしと言葉の根底に、シュタイナーの言う霊的な理想に繋がっていくものを感じたからかもしれない。その意味では梶谷先生が私の「占いに頼る」という非科学的な話をついで、ご自身の「占い」観を披露して下さったことも、驚きに満ちた展開だった。いわゆる「学者」らしからぬお二人に出会えたことは、とてもスリリングで幸せな経験となった。

鳥取の小さな本屋「汽水空港」の店主・森哲也さんは「Whole crisis catalogを作る」という企画を立ち上げ、誰かの困りごとをシェアしてみなで考えるという取り組みを実践されているが、最近「スピラずにスピる」ことが必要であると考えているという。それは、目に見えないもの、聞こえにくいものを感じとるセンサーをそれぞれがもう少し磨いていく、ということであろうし、「科学」や「客観性」を絶対のものとする場所からいったん距離をとって、これまで「非科学的」と忘れ去られてきたものをも含めて、そのメッセージを受け止め、自分の言葉で考え始めることなのではないかと思う。それは長いこと、見向きもされず、切

り捨てられ、語られてこなかったものを掬い上げる作業でもあるだろう。そうした積み重ねの先によりやく理想というものが、殺伐としたこの社会に取り戻されていくような気がしている。

文章とか書いちゃってる感じですか

永井 玲衣
哲学研究者

「文章とか、書いちゃってる感じですか？」ある学会の帰り道、知り合いの哲学研究者に言われておどろいた。そのひとは、わたしが哲学のエッセイを書いていることを、SNSを通じて知ったという。駅までの帰り道は、思ったよりも長く迷いやすかったから、この不安な気持ちが、その言葉によって引き起こされたのか、それとも迷路のような道によってなのか、すぐにはわからなかった。

「文章とか」「書いちゃってる」「感じ」。そのひとの笑顔からは、直接的な悪意や侮蔑を見て取ることはできなかったが、数年経ったいまでもその言葉が頭にこびりついている。それはきっと、その言葉がショックだったからというよりは、「哲学」と「表現」というものの関係を、自らに問うことを課すからであるように思われる。

思えばわたしが惹かれるのはいつも、哲学者よりも詩人の言葉だった。哲学者たちが真剣なまなざしで世界に迫ろうとするように、詩人たちもまた言葉の力で深く潜ろうとしている。

19歳のとき、ぼくは初めて詩集を出した。そのあとがきに「偉大な政治家にならなくともよいし、偉大なスポーツマンにならなくともよい。ただ、偉大な質問者になりたい」と書いた。その頃、私にとって人生はまだ始まったばかりだったので、多くの未知のものが横たわっていたのである。

私は思ったものだ。私自身の存在は、いわば一つの質問であり、世界全体がその答えなのではないか、と(寺山修司『ぼくは話しかける』)。

寺山修司のこの言葉に、わたしは自分の哲学の動機を見つけたような気がした。わたしは偉大な教授にならなくともよいし、偉大な有名人にならなくともよいから、偉大な質問者になりたいと思った。世界内に存在し、そこに根ざしながら、世界をよく見ること。ただ見るのではなく、もっともっと見ること。そのために問うこと。問うて、聴くこと。そしてそれを哲学と呼びたいと思った。

その実践のひとつとして、哲学対話がある。人々と集い、世界に問いをなげかけながら考える。話すだけでなく、よく聴きあい、見えないながらも手をのぼして探究を重ねる。そこで取り扱われる問いは「高尚」である必要はない。哲学は何もバカにしないからだ。普段は気にも留めない些細なことでも、存分に考えることがゆるされる場が哲学的なのだ。

哲学対話でおこなわれるのは、考えることはもちろん、聴くこと、そして語ることである。ひとは、自分の考えを語ろうとすると、明確で整えられた言葉を提示することはほとんどない。紋切型が語られることもあるが、それがどのように表出されるかは、そのひとつごとに個性があり、かけがえなさがある。決して取って代わられることのない、独自性がある。頭の中でこねくりまわされた考えを語る時、思わず聞いてしまう時、それは表現そのものとなる。

だがわたしたちは、表現するという事に恥ずかしさをおぼえもする。自分の考えたことを人前で話すことに躊躇うのは、それが間違っているかもしれないというちいさな恐怖心だけでなく、表現をするという行為に慣れていないという気恥ずかしさもあるだろう。

語ることよりも書くことに力点をおけば、より表現のニュアンスは強くなる。だからこそ「文章とか書いちゃってる感じ」といった言葉遣いになる。何か「表現みたいなこと」、しっちゃってるんですか？という意味を受信してしまう。

たしかにわたしが書く文章は、論文ではない。論文も書くが、エッセイのほうがはるかに量としては多い。そして、誰か哲学者の言葉をわかりやすくまとめたり、紹介したりするような文章ではない。もしくは社会を批評するような俯瞰的な立場で現実を切り取るような立場でもない。わたしにとって哲学することは、書くことを通しても可能である。それは、質問者として、言葉を磨き、世界に対する見方を研ぎ澄まそうとする行為である。

哲学は何もバカにしないと先に書いた。そう、哲学は、普段は意識にのぼらず、どうでもいいとされ、取るに足らないとされているものも考えることがゆるされる。それは表現という枠組みでも同じだ。論文や新聞記事では、記録されず、捨象されてしまうようなことも書きたいと思った。それが可能なのが、エッセイという形式だったというだけである。はるか高みから見下ろして何かをまとめあげるというのではなく、世界に根ざしながら、曖昧なもの、思考のもつれ、わかりづらさをそのまま書きたいと思ったのだった。

それでもやはり、わたしたちは哲学と表現というものに距離を感じているように思う。結果「哲学的」と評される作品は多くあるが、哲学者や哲学研究者の「作品」は、そんなに多くは見当たらない。

哲学は難解だとよく言われる。哲学は専門的だとも言われる。哲学は身近な営みであるとも言われる。哲学とは一体何なのだろうか。

哲学とは何かと問われると、哲学(研究)者は思わず姿勢を正してしまう。しかし、もっと自由なものであってもいいのではないだろうか。問いを見つけ、わたしのため、もしくは誰かのために言葉と世界を関係させ、世界に対する偉大な質問者として生きる。これもまたわたしは哲学的な営みだと呼びたいと思う。

共生としての自由

中里 晋三

東京大学共生のための国際哲学研究センター(UTCP)

希代の数学者アンドレ・ヴェイユの妹であるシモーヌ・ヴェイユがレジスタンス運動に身を投じて1943年に34歳で病没する直前、恐らく絶望に打ちひしがれながら最期の熱情をもってしたためた草稿はのちに出版されて『根をもつこと(L'Enracinement)』と題された。死後、約80年のときの経過は、時代の表面的な進歩をさかんに主張するようであり、実のところ彼女が斃れた地点といま私たちがいる場所とはほとんど同一だ。その書の劈頭で主張される「いかなる意味においても義務は権利に先立つ」という美事な独断が不協和音をともなってしか私たちの耳に届かない事実が、「権利」概念に拠って立つ社会にいつでも「権利擁護」とはほど遠い現実が付きまとうことの証左と思う。

考えるに、シモーヌの独断の「いやな感じ」は、「権利」を貶め、「義務」の絶対化を図る彼女の主張があたかも「自由」の否定と感じてしまうがゆえだろう。けれども、選択肢の多さがそのまま自由の程度を表すかのような(卑しいバージョンの)成金主義的な発想は捨てなければならない。RPGのなかで主人公がアイテムを獲得するごとにレベルアップするのと類比的に、私たちは自由になれるわけではない。自由とは、何か異質なものと予期せぬ出会いを通じて、今この瞬間に自由になりつつあるという実感が露わにするものであって、目の前に分かりやすく提示されている階段を一段一段登って行くのとは、本質的に異なる。自由とは、そのように捉えがたく得がたいものである。しかし自由はそれゆえ、ひとつの奇跡として燦然と輝く。

たとえば美との邂逅は、まさに一つひとつが自由のレッスンだ。なぜ美しさを感じる生物的な機構があるのか。それはおそらく解明しうる。けれど、なぜ美が存在するのかという問いに答えはない。美とは全くの余剰である。そして、この世界になくても何も困らないはずの美がなぜか存在してしまっていることに、私たちはあるときふと気づく。しかも、どうやらそれはさまざま存在するらしいことにも。夏に向かおうとする木々の新緑は、冬の夜空にひとつ浮かぶ満月

は、なぜあんなにも美しいのか。子どもたちの賑々しい声は、愛する人のやわらかな体温は、なぜあんなにも愛おしいのか。世界のなかにたまさか存在する、そうしたものに気づくときに初めて、私たちは美という他なるものに応答する。自由は、まさにその瞬間、私たちが世界のさらなる潜在性に気づき、いっそう応答可能な主体へと転じたことの自覚において経験されるだろう。

自由とは、私たちが自己に異他なる他者と真に出会い、それを肯定しうるたびに、そしてそのことによってのみ得られるのではないだろうか。ならば、自由の契機とは、他者といかに出会うかであって、応答しうる、すなわち責任を果たしうる (responsible) 主体であることこそが自由の条件だ。「義務」は、自由を損ねるところか、自由の本質をなす。そして、応答可能性としての「義務」はまた、この世界に投げ込まれて、生きようとするまえに生きている私たちの根源的な性格でもある。赤ちゃんは生まれた直後から、誰に教わることもなく、身に襲いかかる不快に全身全霊であらがい、どうかしてでも快を作ろうとするのではないか。それは取りも直さず、生まれながらに私たちが持っている「生きる力」だ。

「他者」とは、美を体現するものたちにももちろん限らない。私たちはつい他者を自己とどこまでも対照的にとらえてしまうが、他ならぬ私たち自身、私たちに對して他者である。むしろ自己のうちなる他者にこそ、その他者性は際立つ。そして自己自身とのさまざまな出会い直しは、それゆえ、私たちの自由をそのつど生み出していくものとなる。何らかの困難が乗り越えられたり、思わぬことが可能になったりする形で、自己のうちの他者と出会うこともあれば、融通の利かなさを受け入れるという形で、異なる相貌をもつ自己と出会うこともあるだろう。逆上がりが初めてできた日のうれしさは、できることが一つ増えたことにはあるまい。それは、重力に抗う動きを可能にした、まるでわたしのものではないかのような身体が、わたしのものであった驚きだ。あるいは、目の前で大切ないのちが消えようとするのをただ見守るしかなかったとき、わが身の無力は呪わしいものでしかない。しかしたとえ回顧により、わたしは何もできずとも、消えゆくいのちを訪うことを決して辞めなかったと気づくとき、ヒーローとはほど遠いわたしの新たな相貌が見えてくる。自由は、それらの瞬間ごとに小さく、確かに芽吹く。

私たちは他者と肯定的な出会いを経なければ、いかなる意味でも自由になれない。他者抜きに、自由はありえない。そして、自由の存立がそうだったごとく、他者の存在もまったくの奇跡である。わたしだけでも良かったこの世界に、わたしではないものがある！「わたしのみ在る」を疑わない独我論者として存在を

始めた私たちはみな、かつてそのことに驚嘆したのではなかったか。その驚きをいま一度、思い出そう。

翻って私たちは、長じてともに暮らすようになった人々と、他者として出会っているだろうか。言うまでもなく「他者」なる言葉は、通常、美でも自己自身でもなく、ともに生きる他の人々を指して使われる。では私たちは日々、そうした他者に、他者として出会えているのか。多数でなくてもよい。少数であれ、他者に、他者として出会い続けられているだろうか。

他者との出会いは、予期しえない。私たちは、いつどのように生じるか分からぬものに向けて、たえず自己を開き続けなければいけない。そうせねばならぬ根拠などまるでないままに。しかし、まったくの無根拠において他者との出会いを予感し、信じ続けるものでなければ他者とは出会えない。他者への信仰のみが、他者との出会いを可能にする。それは妄信であっても、盲信ではない。他者とは、私たちの能う限りの感性、感覚を研ぎ澄まして、出会おうとされるものだから。他方、他者は、出会うたびにわたしの理解を超えたものとして、強烈な光芒を放ちつつ、彼方へ後退していくものでもある。対話(dialogue)は、そうした他者との出会いを媒介するが、しかし、それは決して他者を理解するためのものではない。他者を理解するどころか、理解しえないものとして他者を、他者として、浮かび上がらせるものが対話である。対話は、私たちの手が届かぬ彼方を、「あなた」、そして「わたし」という他者として現前させる。私たちは他者とともにあるのだという他者への信仰は、また同時に、他者は無限であると教えてくれる。他者は尽きることがない。他者の無限こそ、この世界の希望である。

シモーヌ・ヴェイユが生まれてちょうど78年後の同日に、わたしは生まれた。そして昨年8月、彼女の命日を過ぎて、わたしは彼女の生きた時間を超えて生き始めた。シモーヌ・ヴェイユはほとんど自死に近いかたちで亡くなったと伝えられている。そこにはどれほどの絶望があったろうか。しかし、わたしは彼女の遺した言葉に触発された希望を語りたい。そしてそのように語られた希望を、現実の奇跡として、わが身で生きたい。他者とともにあることで生まれる自由という奇跡を。

来たるべき風景の予感

中里 龍造

ドキュメンタリー／実験体

—こんにちは。“来たるべき風景の予感”のお時間です。この番組では絶望に対する処方箋の研究開発をテーマに様々な分野の専門家をゲストに迎えて、来たるべき風景を召喚していきます。本日のゲストは、ドキュメンタリー／実験体の中里龍造さんです。よろしくお願いします

中里: よろしくお願ひします

—中里さんの活動について教えてください

中里: 制度の境界面に起こる摩擦に関心を持って制作を行ってきました。主な作品は“創作あーちすと”として活動する“のん”さんの挑戦を追いかけたドキュメンタリー番組『のんたれ』(YouTube Originals)があります

—肩書きの“実験体”というのがあまり耳馴染みがないのですが、どのようなものでしょうか？

中里: 自分が一貫してやってることは、絶滅危惧種の保護活動のようなものな気がします。マイナーな感覚だったり、持って行き場のないマージナルな感情やカテゴライズできない存在を認めて、そこにある美しさや価値をレアなキラカードみたいな感じでカッコいいものとして肯定していきたい。そんなマインドで作品をつくってきたのですが、そのことを絶滅危惧種の保護活動と言うと誤解されることもあるので、“実験体”と今は名乗ってます。自分なりの問いに対して、身をもって体験して試行錯誤しながら回答していく、大喜利のようなものだと思っています

—そうなんですね。実験体としては具体的にはどんな活動をされていますか？

中里:最近は、コロナ禍で身動きが取れなかったこともあり、家で静かにインディーズのエネルギードリンク“メロメロ”をつくっていました

ーそれはレッドブルみたいな感じですか？

中里:まあそんな感じですね。ただ従来のエネルギードリンクは砂糖やカフェインがドバドバ入っていて、体にあまりよくないのですが、僕のつくってる“メロメロ”はハーブやスパイスと無数の愛の記憶を独自に調合した体にやさしいドリンクを目指しています

ーなぜエネルギードリンクをつくろうと思ったのですか？

中里:今から10年ぐらい前、北海道の道東地域をリサーチしていたことがあって。その時出会った釧路で暮らす子達と、僕らの生きる日常や関係性に、自分たちに必要な物語を探していくという設定＝フィクションを持ち込むことで、どうしたら他者と共にいられるのかを考える映画をつくろうとしました。一年ぐらいかけて準備して撮影に臨んだのですが、失敗して

ーそれがエネルギードリンクをつくるきっかけですか？

中里:いや、まだまだ話すといけないのですが、その映画制作に失敗したことがすごくショックで、自分なりにうまくいかなかった原因を考えました。そのとき、同じ日本に生まれて、同じ時代に生きていても“違い”があること、つまり、共有できない感覚やリアリティがあることに気づいて。彼らが暮らす場所の時間軸や空間軸をもっと知りたいと思い、北海道という“土地の精神性”のリサーチを始めました。土地の精神性のリサーチと言っても、自分は特別な専門性もなかったので、その時々で興味のある分野の専門家に声をかけてリサーチしていました

ーそのメンバーでエネルギードリンクをつくったのですか？

中里:そのメンバーではパーティーをつくりました

ーえ？パーティーですか

中里:はい、リサーチの集大成として、“土地の精神性”への自分なりの返礼として氷った湖の上で月に捧げるパーティーを開催しました。この体験が強烈で。その体験を映像にアーカイブしたのですが、なぜかじっくりこなくて。参加者たちで話し合った結果、記憶のアーカイブとしてエナジードリンクをつくることになりました

ーパーティーの記憶のアーカイブから生まれたんですね

中里:はい、でも僕は普段あんまり料理もしないので、いざエナジードリンクをつくろうと思い立ったものの、さてどうしようかな?と。とりあえずAさんという、人気料理店のオーナーで、ミシュランとかでも星をとっている料理研究家の方に相談してみることにしました。すると、すごく親身に相談にのってくれて

ーそれはよかったですね。レシピのアドバイスをくれたのですか?

中里:いや“物語”やコンセプト、心構えみたいなアドバイスがほとんどでしたね。エナジードリンクのコンセプトは“人類の愛をサポート”するドリンクだとか、キャッチコピーは“あと何人に出会えるかな?”ね、とか、どんどんアイデアが出てきて、気づいたら人類の愛を救うビッグプロジェクトになってました

ー壮大なヴィジョンですね。コピーの“あと何人に出会えるかな?”とはどのような意味ですか?

中里:Aさんと話すうちに、愛とは答えが出ない問いで、愛の定義やイメージも人によってさまざまなのだから、このエナジードリンクが完成するには無数の愛の記憶、トラウマ、問いが必要という話になりました。つまり多くの人とのお会いが“物語”になり、それがレシピになるということです。また、ドリンクが完成するには「中里くん自身が大恋愛をして失恋する必要があるわ、2回ぐらい」とも、預言されました

ー愛のフィールドワークということですね。実験体の意味がようやくわかりました。失恋はしたのですか?

中里:そうですね。ちょうどエナジードリンクをつくりはじめた頃、僕はと

ある台湾人の女の子に恋していて。そのことがきっかけで台湾のカルチャーに興味を持ち、台湾に通う中で、親切でキュートで素敵な子たちにたくさん出会い、ちゃんと失恋もしました。ハートが蒸発してまっすぐ歩けなくなるぐらいのとんでもないのを。道端で見かけた傷ついた鳩を家に連れて帰って家の中が鳩だらけになっていた女の子や、おじいちゃんが有名な海賊だった女の子、DJでかける音楽を通して異星人に地球の歴史を伝えようとしている女の子など、みんなユニークな物語の上を歩いていて、とってもチャーミングでした。彼女たちの存在はエナジードリンクになんらかの影響を与えている気がします

ースパイシーなエピソードですね。でも食材やレシピはどうしたのですか？

中里:食材は、漢方やスパイス、ハーブなどを10数種類調合してます。つくり方は、フィールドワークで通っていた台湾の漢方屋さんがヒントになっています。台湾の漢方屋さんでは、薬を処方するまでに結構長い時間おしゃべりするみたいで、すると他のお客さん同士でも待ち時間になんとか会話が生まれて、ゆるいコミュニティができるんですよ。漢方自体の効能も大事だけど、そのおしゃべりの時間も同じくらい体や心にとって大事な気がして。そういう風景への憧れもあり、自分も個別に色々な人の愛や恋の悩みやエピソードを聞いて、そこから見えてきた問いに対して対話を重ねながらレシピをつくってきました

ーさまざまな人との出会いからレシピがつくられて、エナジードリンクが完成したのですね

中里:いや、たぶん完成はしないというか、完成を目指してなくて。基本のレシピは完成しましたが、愛のサグラダファミリアみたいな感じで、人が恋をして愛にときめいたり傷ついたりして、無数の愛のかたちが生まれるかぎり、このドリンクもその愛のカたちに対応して新たなレシピがつくられていくものだと思います

ーなるほど。中里さんの活動を形容するなら、アーティストやデザイナーみたいなことになるのでしょうか？

中里:いやあ、なんですかね。自分なりの問いを見つけて、それについて考えるという意味では、哲学とかも近いかもしれませんね

ー哲学ですか

中里:はい。自分が何かをするときは自分なりの問いがあつて。その問いがわからないから、つくっている気がします。今の時代はネットで簡単になんでも調べられるけど、本当に自分が知りたいこと、考えたいことはGoogleで検索しても答えが出てこないことばかりで。例えば、問いが生じる原因に、社会制度や自然の法則など様々な要因があるのかもしれないけど、それを分析して問いの解像度が上がっても、すぐに解決できないことがほとんどで。それでも自分が生きていく上で切実な問いなら、自分なりにその問いに向き合っていくことが必要になる。自分は何かをつくることでその問いに対する考えや回答を実践しています。そして、自分が何かをつくる時はいつも“ない”からつくっています

ー“ない”からつくる

中里:例えば、自分の傷や痛みが病院で治療できないものだったら自分でケアしたり、居場所を探して見つからなければ自分でつくったり。既存の制度や環境が不十分なら“つくる”ことで整備していく。そんな感じで生き延びる技術として“つくる”ことをとらえています。とかいうと、めっちゃくちゃ器用でバリバリつくれる人みたいな感じですが、ドラえもん言うなら自分はのび太の方で。苦手なことばかりです。不器用だけど、つけれないと死んじゃいそうだから、色々な人の技術やパワーを借りながら、なんとかつくっています

ー中里さんがつくるものは社会的にどのような意味があると思いますか？

中里:それはわかりません。ただ、自分で色々試したけどわからないことを問いとして、この世界に置いておけば、誰かが、問いの続きを考えたり、答えを見つけたりするかもしれません。その瞬間に立ち会うことができなくても、そんなふうな想像をして何かを残しておくことはドキドキします。もしかしたら、自分がやっていることは、ミステリーサークルやオーパーツなど、そういう類のものに近いのかもしれませんが。誤解でもいいので、誰かの想像力を刺激するものになったら嬉しいですね

ーなるほど。ちなみにエナジードリンクはどこで買えるのですか？

中里:YUMEGIWAというオンラインショップで販売しています。よかったらぜひチェックしてみてください

—ご興味がある方はぜひ。本日はありがとうございました

中里:ありがとうございました